Bible of No name city

スタンリッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｉｂｌｅ　ｏｆ　Ｎｏ　ｎａｍｅ　ｃｉｔｙ

【Ｎコード】
Ｎ９５４８Ｃ

【作者名】
スタンリッチ

【あらすじ】
一時代前、ここの町はブルーイナフと呼ばれ、たった１３人の異能集団が君臨していた。本能の町・・名も無き町・・現在はナインポインツと言う名に姿を変え、９つのチームが聖地ブラッドバンクと支配権を求め争っている。Ｓｈｏｏｔ－Ｂｌｏｏｄ－Ａｎｏｔｈｅｒｗｏｒｌｄできればコメおねがいします。

プロローグ　ブルーイナフ２００２

プロローグ　ブルーイナフ２００２

雷鳴轟く嵐の夜。窓に吹き付けるスコール。一瞬の光に乗じる夥しい血痕。薄い闇に混じった死臭。

「サーティーン・・腕が落ちたんじゃないか？」

不適な笑みー白髪。対戦闘に計算付くされたボディーライン。日本刀。

赤いブルゾンは返り血で染まっている。

ガシャン・・鉄鋼の衝突音。両手に刻まれた文字［ボニー＆クライド］

「な～に・・お前を締め上げぐらい錆びたスパナで十分だろ・・ファースト」

同時にダッシュ。鉄甲がフロアを掠め火花を出す。低空。

待ち受けるファースト。鞘に納められた刀。ゆっくりと虹色に輝く刀身が辺りの暗闇を吸収していく。

「今のお前では俺には勝てない。サーティン・・お前が弱体する前にあの女を斬っておけ。

ばよかった。」

一閃・・受け流す鉄甲＆回転、裏拳・・スウェイ＆十字の二段切り・・バックステップ

「今日はよくしゃべるじゃね～か・・このマスカキ野郎が・・てめ～がブルーイナフを裏切るなんてな」

ステップイン＆上下のコンビネーション・・かわし穿つ・・鉄甲＝火花

「生憎、俺の器はこの町じゃ狭過ぎるんでな」

「やっぱインテリはジョークが面白くね～」―ガシャンー「もう泣

いても許さないぜクラウス」
弾かれる刀・・拳打・・スウェイ&薙ぎ払う・・刀&鉄甲＝交差
「ガキの頃以来だな・・お前にそう呼ばれるのわ・・」
「嫌いなんだろ・虐められっ子のクラウスが。」
前蹴り・・鉄甲のガード・・両者弾かれる・・ぎりぎりの間合い・・
硬直
「高みに昇る崇高な魂。非道になりきれないなら親を斬り・・足を引かれるなら仲間も斬る。
・・俺と一緒に来い・・こんな薄汚い街の頂点に立っても与えられるのは吐き気だけ。俺はお前の戦闘能力は高く買ってるんだ。」
「はっ。どうやら馬鹿は高い所が好きってのは本当らしいな」
「残念だよ・・サーティーン。ブルーイナフの悪魔が・・地に足を付けた結果がその答えか。女は消えた・・お前にはもう何も残ってないだろ。」
「俺は元の鞘に戻るだけだ・・だがお前の歩む道には死体が転がりそうだからな。」
「お前らはいつも綺麗事をぬかし、高みを目指す崇高な魂に泥をぬる。強欲の虜になるべきだったんだ・・ブルーイナフの１３人に欠けていたのは次なる野心・・」
「俺もその意見には同感だが・・てめーはやりすぎだ。」
灰色一色。スローモーションの深海。最自由。＝サーティーンの世界が張り詰めた空気を支配していく・・
「お前は昔から甘いんだよ・・清春。」
ファースト&サーティーン
「お前の理想はくだらない。」
「てめーの理想はくだらねー。」
殺伐。重圧。凍てつく七色の光。＝ファーストの世界がサーティーンの世界を穿つ。
・・交差する決定打。空を切る拳の刃・・突き刺さる虹色の刃。
「本当に弱くなったな・・昔のお前が好きだったよ・・女は見つけ

だして・殺しといてやるからあの世ってのがあった永久に愛を語りあえ・・」
胸に滴る血・・刃をめり込ませファーストの首を鷲掴む。
「やっぱり・・てめーは仕留めとく必要がありそうだ・・」
「死に底ないが・・」
虹色の刃が血で染まる・・。
「時と共に老いいる魂だとしても・・一度誓いを立てたら命が尽きるまで・・女神との約束を果たそう。」
「く・何を・・」
「・・まだ１０カウントを数えるにははえーっつってんだよ。マスカキ野朗。」
顔面への強打・・吹き飛び膝を着く・・抜き取り振りかざす刀
破裂音・・コンクリートの壁が崩壊・・セカンド&シックスの声
「サーティーン何処だ。」
・・バックステップ・・
「ツキは俺を見放さなかった。その刀は冥土の土産にくれてやる。」
「てめーを串刺してやる。俺みてーにな。」
「強がるなよ。その傷では立ってるだけで精一杯だろ。この先お前らの運命はブルーイナフの亡霊として最下層まで落ちるんだ。
それがこの町の掟・・暴力と強欲の町・・そして・・名も無き町。」
視界には消えていくファーストと血の海に横たわるブルーイナフのナンバーズと仲間たち。セカンドとシックスの声が聞こえる。
目の前が暗くなってきた・・少し眠りたい。聖地ブラッドバンク・・
この町の歴史は常にここで変わる。
それが今日だったなんて・・声が・・遠くなっていく・・・

第一章　ナインポインツ２００９　一幕Ｐｌａｎｔ&Ｐｌａｎｔ

機械音が重なり合う無機質なノイズ。
ナインポインツ郊外にある印刷工場は「人生の墓場」と呼ばれている。
枯れ行く植物人間達の巣・・俺も同じ意見だ。小銭を握り締める為に感情を殺し鉄くずと同化。
真面目な馬鹿には打って付けだと、まともな奴は捨て吐くき魂を劣化させて行く。
灰色の壁が牢獄の様にネガティブな空間を包囲。
壁一枚、挟んだ世界から五月蝿いぐらいなる選ばれた人間・・が作りだしたミュージック。
ひどくポジティブで攻撃的なリリックで脳裏で踊るロックスター。
カナディアンがイエローモンキーをバウンスさせる。
そいつをつまみに隣で会話を弾ませる男たち。
「俺も昔バンドやっててモテてたんだぜ。」・・と、ニヤつくデブ。
やつれた男はデブの機嫌を窺う様な眼つき。
「おれもやってましたよ。オールコピーですけど。」
「は。コピーじゃ話になんねーだろ。もっとこう・・クリエイティブなもん捻りださねーと。」
「オリジナルを作っても売れないとここで重労働する羽目になる。」
口を滑らしたかの様に口を塞ぐが、デブはおどけた男を満足げに見下していた。
「ちがいねー。夢見る若者の成れの果てが俺って訳だ」
さらにオドオドとしだした男を俺は無表情に眺めていた。俯いた目線を泳がし獲物を見つけたハイエナ。
話の方向を自分以外に向けた打開策。男は小声で・・俺にも聞こえる程度の声で。
「それより、あいつ・・知ってますよね。」

二人はあいつを盗み見る・・気分の悪いこった・・いやらしくニヤつくデブ。
思い出した・・こいつは通称ブル。ボスつらした最低賃金労働者の古株。一度、弱みを見せたら最後、骨まだしゃぶられ贅肉の足しにされる。
脂肪でたるんだ顔はブルドックよりのきついが、ニックネームの由来はここだろう。ここで生きる術を身に着けた番犬。
ブルの声はさっきから耳障りだ・・
「天から地に堕ちた奴だろ。ウケるよな。」
「あのブルーイナフの１３番目もここじゃ新入りですよね。」
「あぁ、、堕ちた奴は無様だよな。その点、俺たちを見ろ。これ以上堕ちようの無い生き方をしてるからこんなとこでもやってける。」
「ブルさん、それって・・だけど新入りには教育が必要ですよね。一年もあいつには誰も手をだして無いんですよ・・」
トラの柄を借りたハイエナは上っ面の鋭い睨みを利かせた。
「おいおい。腐ってもあのサーティーンだぞ・・」
「大丈夫ですよ。ここで一発釘刺さないと、他の奴らにもしめしがつきませんよ。あいつ下に着ければ、もううち等逆らう奴いなくなりますよ。
それともブルさんビビッてるんですか。」
一瞬、苦い顔をしたがすぐに厳つい顔を作り直した。
「・・・そうだな・・俺の力を示してやる。てめーも俺に嗾ける様な真似は二度とするなよ」
威嚇する様に痩せこけた男を片手でなぎ払い叫んだ。
「新入りー。」
「くだらねーがこれが現実か・・泣けてくるぜ・・」
ため息混じりに吐き捨てた。
「ムカつく野郎だ・・おい、先輩の言うことは聴くもんだろ。それとも、元ブルーイナフの１３番目は作業員に身を落としてもＶＩＰ待遇を希望か。」

「自分に何も無い奴ほど年功序列が大好物なんだよ。知ってるか・・いや、お前見たいのは十分承知の上、糞を踏み染め生きているんだろうけどな。」
痩せこけた男は無言で睨み付けている。
「OK。まずは口の利き方から教えてやらねーとな。いいか、どこの世界にもルールってもんがあるだろ。これは見えないが息を吸うよりも重要だ。お前の主張なんて俺たち世間様ってのに潰されるのがオチ。いきがっててもいつか俺達と同じ世界で同じ様に新入りをいびり、つまらねー愚痴にジョークと糞を吐き出すだけの人生だと理解する。何故だか分かるか・・俺達の人生に意味なんてないからだ。御高くとまってる様だが、お前のプライドなんてこの町ナインポインツでは最低賃金にも満たない安代物、ここで生きたかったら小銭に頭をお下げ、先輩に可愛がられた方が利口な生き方だ。だから、社員に媚を売る前に俺のあそこをしゃぶるんだな。」
睨んでいた面を一転させてブルのジュークに反応する男。
「はは。それじゃー口の使い方も教えねーとな」
それを誇示するかの様にニヤついている。本当にうんざりする世界だ、、
「くだらない演説だな。お前らのルールブックに二つ付け加えてくれ。ルール1、まず朝起きたら歯を磨け、、ドブ臭くて鼻がへし折れそうだ・・ルール2、ダイエットでもしろよ。しゃぶって欲しい訳は自分でモノを握れないからじゃないのか、、おまけに女に相手にされないからって男にさせるって、、そいつの口から嫌な匂いがするぜ。だから、俺にとやかく言う前にまずはルール1だ。」
「ちぃ・・まだ空気が読めない様だ・・ここじゃブルにブルっちまう方が得だっててのにな」
太りすぎた体を威圧感に変化させた典型的なゴシック・フェイク・サッグ。胸倉を掴みかけた短い指。パシっと弾かれる。痩せた男は影からスナイプする様に罵る。
「ここがハム工場じゃなくてよかったな。空気が読めなくて、てめ

ーを冷凍された豚と同じフックにかけてロッキー・バルボア並のパンチを浴びせてやりそうだ。」
「こいつ・・ぶっ殺すぞ」
「安い殺し文句だな・・ブルドック野郎」
警備員の様な軽武装で工場の社員は囚人を見る目つきで監視していたがようやく異変にきずき、走りよってきた。
「ブル何やってんだ。」
悲しい条件反射。舌打ち。小声で警告。
「ブルーイナフはナインポインツじゃ過去の産物だ。お前も死んだお仲間の元へ送ってやるぜ・・」
やっと臭い息から開放されたようだ・・ブルーイナフは過去の存在、それは間違っていない。時代に取り残された亡霊。もう七年もたったがあの日、俺はすべて捨てたはずだったが・・一つだけ残ったものがある・・
「お前が・・清春か。」・・社員は無表情を装ってる様子。意外と若い・・新入社員といったとこか。
「あぁ。だったらなんだ。」
息を大きく吸い込み、吐く。こいつの中で攻撃の態勢が整ったらしい。分かりやすい奴だ・・。
「お前らここをナインポインツのストリートと勘違いしてんのか。規律を守れないならとっとと失せな。暴力しか能のないお前らの代わりに職にあり付きたい奴は五万といるからな。」
「はん・・分かってるって。あんたには逆らわねーよ・・例え新人社員でもな。それは俺の担当外だ」
ブルは意味ありげにニヤついた。ここにいる限り何処も変わらない・・おそらく、そういうことだ。ブルと痩せた男は舐めた目で二人を見て去って行った。
「清春・・お前があの・・一様、忠告しとくがブルには気を付けろ。ここがサバンナならあいつは孤立した獲物を狙うハイエナだ。まぁ・・今のもさっきのも、先輩の受売りだけどな。」

まだ青さの残る笑顔で笑いかけてきた。風貌は制服を着ているだけでダウンタウンの売れないラッパー。どうみてもサラリーマンにはみえないが・・

「ハイエナは群れても所詮ハイエナだろ。」

「数は力だ・・いくらあんたでも分が悪いだろ。」

「暴力はご法度なんだろ。あいつらがそれ以外の解決策を考えてるとは思えないけどな。」

「会社は組織だ・・金が絡む以上、俺も公なのは見逃せない。出来損ないの悪党と植物人間の管理で家族を養ってる。規律を乱す様なら・・分かるだろ。」

一瞬、ばつの悪そうな顔で見上げ、話を切り替えた。

「そうだ、ブルーイナフの話聞かせたくれよ。俺あんたのファンだったんだよ。」

きらきらした目で聞いてきたが、愛想のない言い方で答えた。この世界にうんざりして枯れかけていたのかもしれない。

「町の名がナインポインツになったんだ、そんなもん聞いてどうする。」

「俺たちは真実を知りたいだけだ。色々、流れてる。妙な噂から映画の様な作り話も今じゃ定番になってる。１３人の中にユダがいたってな」

「・・俺達の中にも随分口の軽い野郎がいたんだな。」

遠くから大きながなり声が響いた。

「斉藤。いつまで油売ってんだ。」

「やべ・・見つかった。・・すいません先輩、今行きます・・。あっ、清春・・あんたに客だぜ。」

「は。俺に客。」

「正面の大通りにいるそうだ。抜けさせてやるからいきな。」

「なんでそこまでするんだ。俺には何の義理もないだろ。」

「言ったろ。俺はあんたのファンだって。それに元ナンバーズ同士の再会ってのに貢献でりればツイてるってもんだろ。俺の知る限り

ブルーイナフの１３人は最高のチームだったからな・・早くいけよ。」
がなり声。
「斉藤。てめー何時から俺を待たせられるほど偉くなったんだ」
「す・すいません。」
頭を小突れながら愛想笑いをふりまいている。がなり声の奴も斉藤のことをまんざらじゃない感じで怒りをぶつけている。いいチーム・・それに、ナンバーズ・・生き残った五人・・ユダ・・・俺に何の様だ。

プラント　正面玄関入り口

客って奴に近着くに連れ、さっきの音楽が鼓膜を刺激してくる。耳障りじゃないが今はそんな気分でもない。大通りに面した工場地帯に派手なキャデラックがうねりを上げ、薄汚れた作業着姿の男を待っている。この場に似使わない車からは見慣れた顔が乗り出した。
「清春。待ってたぜ。」
ＮＯ、２・・セカンド。
「スネーク・・」
「なんだその格好。お前がこんなとこで働いてるなんてウケるぜ。」
何の反応も見せずにキャデラックに乗り込んだ。車内は昔と変わらないスネークご愛用の甘いバニラの香りが漂っている。
「今更何の様だ。知り合いには話した覚えが無いんだけどな・・相変わらず鼻が利くな」
「俺は蝮だぜ。鼻なんか利きゃしねーよ。」
潰れた鼻をペタっと押した。サモア系のガタイを揺らしダボっとしたＢ系ファッション。この鼻と雰囲気はブルーイナフ結成前からの相変わらずスネークだった。今更、昔話に花を咲かせるつもりも無かった俺は、この匂いをかき消すかの様にタバコに火をつけた。
「随分と羽振りが良さそうだが何してんだ。」

過去を振り返るように大きくため息をついた。
「今の俺はナインポインツの一角、スネークヘッズの頭だよ。初めてお前と会った時みたいなギャングチームじゃないぜ。ビジネスで今の地位まで上りつめたんだ。」
「それは正解だ。お前はでかい割りに強くねーからな。」
「お前ら化け物と比べんなよ。俺の能力はギャンブル・・洞察力、つまり駆引きだぜ。どんなポーカーフェイスな野郎でも手札を暴き出す。清春・・お前はこんなとこで燻ってる人間じゃないだろ。」
「なんでもお見通しって面だが、あれから7年もたってる。永過ぎる月日は人を腐らして当然だろ。」
バン・・ハンドルを叩く。スネークのマジでムカついた顔。
「サーティーン・・てめーもジンクスってのに遣られた口か。」
俺が嫌いなこと、いつの間にか受け入れていた。
「てめーも・・」
胸倉を掴みワンパン。
「俺を見ろ。また一からやり直せたんだよ。七年のかかってな。それなのに、てめーは
いったい何をしてたんだ。流れ着いた先が人生の墓場で死体の真似事か。これじゃてめーのやって来たこと、おれ達との事が嘘みてーじゃねーかよ。久しぶりに会ったってのにがっかりさせんなよ。」
・・・
「相変わらず人をのせんのが上手いなスネーク」
「もうガキじゃないんだ。ここを飛び出すきっかけなんて俺に作らせんなよ。」
胸の手を払い空を見つめた。いつの間にか雨雲が空を覆い、ボンネットに大粒の雨が降り注いだ。
「泣きたいのはこっちだぜ・・。」
強まる雨音。
「はっ。」
「何でもない。俺はもう行くぜ。」

フードを被りドアに手を掛けた。スネークはジッと正面をにている。
「スネーク・・ありがとな。」
「ここを辞めたらお前に打って付けのポジション用意しとくぜ。」
「これだけで十分だ・・もうてめーの世話にはならねーよ。」
強まる雨の中、車を後にした。
「清春。」
立ち止まり振り替える。
「明日の八時・・カートルームで待ってる。俺は蛇、、諦めないぜ。」
「ヘッドハンティングならお断りだな。」
苦笑いと共に雨は強まりキャデラックは消えて行った。

正面玄関に向かう途中。雨に打たれながらジッと待つ者がいた。哀愁漂うっていうか異様な狂気を纏っている。
「これは珍客だな。」
「待ってたぜ新入り・・お前には特別授業のサービスだ。」
「なんだってんだ。今日は厄日か、止めとけよブルドック野郎。今の俺は気分が良いんだ。」
振りかぶる大降りのパンチ・・かわす・・
正面玄関でこっちの気配を伺う斉藤。目でそのことを合図したがお構いなしのブル。俺を潰したくてしょうがないらしい。
よろけた体勢を戻しさば折・・
「口に効き方から教えてやるよ。」
「使い方の間違えだろ。腹がつっかえて自分の息子も握れないか。」
「てめー・・いい加減にいろよ。」
同時に体ごと灰色の壁に突っ込んだ。・・軋む
斉藤はそう通りの展開に対処すべく走り寄る。ブルは頭に血が上ってるらしく形振り構わず襲い掛かる。悲鳴。
「ブル止めろ。」
片手で吹っ飛ぶ斉藤。

「てめーはひっこんでろ。」
「ぐぅ・・こんなことしたら・・」
睨む・・黙り震える。
「おい、ブル。お前さっきよりノリがいいじゃねーか。」
「てめーもやる気満々て感じだぜ。」
「あぁ。今日はスネークに踊らさだれてやるぜ。」
「セカンドってのがきてサーティーン復活か。青臭い話だな。」
拳打&ヒット・・倒れる巨体。
「てめーのドブ臭い息よりましだろ。俺がサーティーンと踏まえて襲ってくる奴はひさしぶりだ・・これはワンちゃんてのは失礼だったか。」
ブルはよろけながら立ち上がった。
「俺を・・舐めるなよ。これでも・・昔は・・」
「なら・・お互いこんなとこおさらばしようぜ。」
鬼気迫る表情で両腕を振るうブル。
「あばよ。ブルファイター。」
突き刺さるロシアンフック・・沈黙・・意識を失いコンクリートの池に崩れ去る大男。
その時、ブルにブルってた斉藤の金縛りが解けた。よく観ればギャラリーも顔を覗かせている。
「清春・・やっちまたっな。もうここには入られない・・。」
「あぁ。分かってる」
BUUUUU
斉藤は救急車の手配をし、ブルは濡れ地面に顔を付けたまま動かなかった。ギャラリー仕事のチャイムを聞くと何事も無かったかの様に散って行った。
俺はロッカールームに向かい、来た時と同じゴミ袋に私物を詰めていた。高らかな笑い声が聞こえる・・さっきの痩せた男だ。
「いやー助かったぜ。お前がブルをやってくれたをおかげで目の上のたんこぶがきえてくれたて、これからは俺の時代だ。」

「お前がブルを唆したのか。」
「ずっと待ってたんだ。あいつはなんだかんだ言っても過去に取り付かれてるんだよ。成功できなかったトラウマって奴か。くだらねー。」
「触発できて倒せる奴を待ってたのか、てめーもマスカキ野郎だな。」
「なんとでもいえ・・な・・」
ドカン・・ぐにゃりと、くの字に曲がるロッカー。それになぞる様に痩せた男がへばり付く。
「馬鹿か・・ブルの事なら自分に害は及ばないと思ったか・・カスが」
返事が無い。咳き込む息も飲み込んでいる。
「これぐらいでへばるんじゃ。あいつの後釜はつげないな・・お前はほっといても勝手に干されるだけだ・・好きにしな。」
俺はゴミ袋を片手に工場を後にした。
「クソ・・また振出しに戻った。」と、雨に打たれながらバス停の標識を蹴飛ばした。
バスに揺られながら考えた。老人が嫌な目でゴミ袋片手の若者を見ている。こんなことを七年繰り返したが、スネークは今じゃナインポインツの一角・・差が着いたもんだ。
女神との約束・・俺が求める者はここにはないってのが、スネークが来たおかげでようやく分かった気がする。本当はとっくに知っていた答え・・俺は永く眠っていたようだ。

第一章　二幕　Snake&Seven

第一章　二幕　Ｓｎａｋｅ&Ｓｅｖｅｎ

壁一枚向こう側の世界。生まれ育った町。詐欺・強盗・恐喝・・平凡な世間からしたら薄汚い悪党共。良い事とは思わないが生きるのに必死で、この生活から抜け出したいがこの町でしか生きられない・・この町の創設者はそんな輩だって話。町の名も支配者も坂道を転がる石ころの様にコロコロと変わるが。唯一、変わらないのは人種と土地。そんな世界でも彼女は孔雀が羽を広げた様な綺麗な目をしていた。その瞳を涙で溢れさせたのは・・俺の罪。女神との約束も守れない男に何ができる・・そして、ユダの裏切りで俺は落ちる所まで落ちた。足枷の様に過去を引きずり生きてみたが俺には向いてなかったみたいだ。

ＰＭ７：５０

人目を引き付けるキャデラック。寂れた工業地帯よりダウンタウンが良く似合うスネークご自慢の愛車。ボンネットにはセンスの悪い落書き。オールドイングリッシュで［ＫＩＬＬ　ＹＯＵ　ＢＩＴＣＨ］と書いてある。誰が見ても間違った愛情表現だ。ウーハーはＨＩＰＨＯＰの縦揺れのリズム。マフラーからは図太く鈍いエンジンの排気音が有無も言わせぬ威嚇射撃をする。スネークそのものをモンスターカーにした感じ。だが、そいつを走らせる本人はご機嫌斜め。助手席に乗る男のせいだろう。
態度はでかいが細身のホスト風。銀髪ロンゲをオールバックにしているが、乱れてないかチェックしながらスネークに語りかけている。
「・・・で、お前ならノアの方舟にはどいつを乗せるって聞いたんだ。」

スネークはパーカーを深く被りマルボロを吹かしながら銀髪の話を聞きながしていたが。
「１００人の売女とありったけのバイアグラだろ・・さっきから何回同じ話すりゃ気が済むんだ。・・もう五回目だ・・次同じこと言ったら清春に口を溶接させるぞ。」
「かぁー。きびしいねぇ。清春ってのホントにくんのかよ。工場勤務ね・・お前の知り合いに最低賃金労働者共の仲間がいるとは驚きだね。これだからギャングあがりはビジにならねー。」
「ユニオンスクエアでどじ踏んでここに流れ着いた新参者はしらねーだろーがブルーイナフを舐めるなよ。あいつはブルーイナフの１３番目。カードで言うならキングだぜ。」
「それが今じゃ印刷工場で汗水たらしてんのか。俺の話より笑いとれるぜ。」
スネークはスピーカーのボリュームを上げ銀髪のおしゃべりを打ち消した。が、エディ・マーフィーかクリス・タッカーばりにしゃべり続けていた。
車内はＨＩＰＨＯＰのアッパーなチューンも今は極上のアバズレをオタク野朗が口説くふざけた空気を演出している。
何曲か回った頃・・郊外にあるカートルームに到着した。ここはユニオンスクエアとナインポインツを繋ぐ唯一の道にぽつんと佇む。理性と本能を繋ぐ道。お互い用のない町同士、人気もないに等しいが左右どちらに進むかによってその後が決まる。ある意味、有名な場所。
「ワァーオ。西部劇にも出てきそうなＢＡＲだな。」
銀髪は手を銃の形にし、ボルトアクションをしだした。
「セブン・・お前もスーパーコンピューターはバグだらけだな。」
「はっ。７つの頭脳を持つ男に失礼でぜ。くそ蛇ぃ。」
「・・清春はまだ着てないな・・」
「シカトかよー。」
銀髪はニヤリと微笑み。エアーリボルバーをＳＷＡＴさながらに構

えキャデラックから出るや西部風の扉に走りより勢いよく蹴り開けた。
「Ｈｅｙ。ワイルドワイルドウエストからウィル・スミスのご登場だ。」
蛇は「勘弁してくれ」とズルズル、シートに深く沈んで行った。
「おい・・あのイカれ野朗知り合いか。」
「清春。クソ、タイミング悪いぜ・・セブン。」
まだ揺れる扉から不満そうに銀髪カウボーイは帰ってきた。扉の奥にに座る男と目があったが視線がやけに冷たい。セブンと呼ばれる男は人の神経を逆撫でるセンスは最高らしい。
「紹介するぜ・・こいつは内のナンバー2・・セブンだ。頭のネジは緩いけど〜Ｆｕｃｋ　ｙｏｕ〜
、あらゆる犯罪に適応できる。言いたくないが天才は肌って奴だ。」
「マザーファッキンジーニストさベイビー。ていうか、お前が清春・・大丈夫だスネーク。こんなモヤシ野朗、金払わなくても一回戦も勝てやしねーよ。」
「何の話だ。それより良く喋るオームだな。・・なんかくせーぞ・・。」
「は。」
「小動物の匂いがプンプンする。」
「ははーん。キレたぜー。」
キザなジャケットから取り出した、キラキラと光る玩具みたいなバタフライナイフ。チンピラ特有の羽のもげた蝶が舞うかの様なナイフさばき。長い舌をだしての挑発・・映画の観過ぎだ。
現実、この銀髪は二つミスを犯してる。まず一つ、この間合いなら瞬きした瞬間、奴の視界はブラックアウトする。か、妙なはったりを放置し、電池が切れるまで同じモーションを繰り返させてもいいが、二つめ・・スネークはこの状況を許す訳が無い。
カッチャ・・「お前ら止めろ・・」
モンスターエンジンの様な声は重力を増させ、鈍く威圧感の塊と化

している［スネークの愛銃＝デザートイーグルに巻き付いた蛇の装飾］が、セブンに向けられた。
羽のもがれたバタフライが地面に墜落。
「スネークゥ・・そんなもん出すなってぇ・・。」
スネークは今にも弾きそうな眼つきで沈黙。最高級のプラフ・・セカンドの見えざる武器。
切り裂く。
「思い出したぜ。セブン・・ユニオンスクエアで売れた名だ。」
セブンは銃口を見つめながら、ゆっくり口を滑らせる。
「俺の天才っぷりがてめーのどんくさい頭にも届いてるなんて光栄だね。」
「で・・その腐れジーニストに質問したいんだが。オタクにマザコン・・脳みそにウジの湧いた哀れなガキに・・あと四つは何があるんだ。」
「こいつ・・」
セブンが動く瞬間。銃は俺のこめかみに当てられた。
「二度は言わない・・清春・ビジネスの話をしに着たんだ。ここは俺が仕切る。」
「蛇野朗のビジってのはダチに銃を突きつけることなのか。」
「そう噛み付くなよ・・お前の悪い癖だぜ。」
叫ぶ・・
「撃ってみろよ・・今なら勝てそうか。でけー図体してハッタリかましてんじゃねーぞ。」
沈黙・・重圧・・最高級のプラフを嘘にさせる駆け引き。
爬虫類は弱者を震え上がらせる。セブンは蛇に睨まれた蛙の様に喉を詰まらせていた。
「・・人の力には限界がある・・分かるよな。サーティーン。」
撃鉄を起こす・・
「その名はもう寂れてるぜ。セカンド。そんな玩具で神にでもなったつもりか。」

「はは。神はいい過ぎだ・・この場を収めるにはナポレオンやチンギス・ハーンの軍隊に相当する力だ・・違うか。」
「弾いてみろよ。ガンファイター・・俺の頭がミキサーに掛かったトマト見てーになって跪くか・・てめーの顔面がフランケンシュタインみてーになるか・・。」
震えた声で「マジかよ・・」とセブンが呟いた。
「・・止めだ止めだ。お前のそういうトコ好きだぜ。俺らの組織に入れよ・・ブルーイナフの再開と行こうぜ。」
・・・
「銃口を放してから言ってくれるか・・三流ギャング共じゃ話にならねーだろ。」
「言ってくれるぜ。サーティーン。」
ＢＡＮＧ・・
４５口径の銃声・・流れ弾はＢＡＲのカウンター・・銃を持つ手に滑り込んだ左のクロスカウンター・・吹っ飛ぶ巨体。
セブンは目を丸くしワンクッションおいて言った。
「・・ワァーォ・・ジャッキー・チェンかよ。」
口の血を裾で拭きながら、スネークは立ち上がった。デザートイーグルを腰に挿し、かわりに清春を指さした。
「車で殴ったこと根に持ってやがったな・・クソ・・歯が折れたぞ。腕は鈍ってないようだな・・フランケンシュタインってのはマジだったのか。」
「なーに。お前がマジだったら今頃、頭に突っ込むボルトを買いに行ってる。」
冷めた空気を一転させる様にスネークは笑った。それを見て俺も笑った。顎が痛むのか、ぎこちないが大きな笑い声が昔を思いださせる。マジで笑うことを忘れていた、そんな忘れた感じを思い出させる様に二人は笑い合った。セブンは「お前らイカれてんのか。」って面してるがお前に言われたくない。
「セブン・・これが清春だ。ウケんだろ。」

「ウケねーよ。クソ蛇ぃ俺をハメやがったな。」
西部風の扉がドンと開き、マスターがショットガンを突付けた。三人は一斉に手を上げた。俺とセブンは同時にスネークをチラっと見た。
「ボトルが鉛玉に飲まれちまったんですが・・お支払いはどなたさんで。」
・・・
「悪いなマスター。ちょっとじゃれてただけなんだ・・」
視線に耐えかねたのか、ポケットに手を入れるぜって合図で１００ドル札を束ねたマネークリップから二、三枚手渡した。
「あんた、いつものマスターじぁないな。」
「えぇ。経営者が変わったので私が勤めさせて頂いてます。」
金を数えながらの礼儀正しさが違和感を与える。
「あなたの腕も鈍っていない様だ。」
俺はすかさず言った。
「盗み聞きは趣味が悪いぜ。」
「ブルーイナフの方々にお会いできて光栄ですよ。しかし、あれは年代物のボトルでね。あと五枚は貰わないと割りに会わないんですわ。」
「なにー。」・・スネークの悲鳴。手元の残ったマネークリップ。
「はは。うけるぜ。羽振りのいい奴は舌がこえてやがる。」
「ちくしょう・・ツイてないぜ・・」
商売人独特の渋りを見せながら１００ドル札を何枚か渡し、マスターは首を横に振る。そのスネークの大きな背中は丸みを帯びて行った・・壁一枚向こう側あの世界。
「携帯鳴ってるぜ。」
初めてセブンのまともな発言を聞いた。微かに響くメロディは１９９５年流行ったベートーベンの運命を黒人ラッパーがリメイクした曲。
ピッ・・

「・・・はい・・・。・・・・・あぁ・・・・・。」
スネークの表情が見る見る険しくなる。
「分かった・・・。」
様子がおかしい。ビジネスってのでトラブったのか・・足早にキャデラックに向かい振返った。
「悪いがタイムアップだ。詳しい話は副社長から聞いてくれ。」
「副社長。」
スネークはホイルスピンさせながらナインポインツに消えて行った。消えてセブンはバタフライナイフを拾いジャケットにしまった。代わりに櫛を出し窓に向かい髪をチェックしながら言った。
「スネークヘッズのナンバー2ってことは副社長っしょ。アンダスターン。」
俺は来た時と同じ１９９４式のボロ車に乗り。
「俺ももう行くぜ。カマ野朗に聞くことなんてねーからな。それに、俺はスネークの世話になるつもりはないんでね。」
「清春っていったよな。元ブルーイナフだか知らねーけどな。俺を舐めんじゃねーぞ。」
「・・なんだ・・シャブって欲しいのか。」
ダン・・既にボコボコのボンネットがへこんだ。
「話を振出しに戻してーのか・・それよりビジだ。Ｇｉｖｅ　ａｎｄ　Ｔａｋｅ。昔話は関係ねー。ネオブラットトーナメントにタンて奴がでる。俺らの仲間を拷問し使いもんにならなくした報復だ。」
「表向きはまともな会社なんだろ。随分と物騒な話じゃねーか。まぁいいが・・報復ならわざわざトーナメントでしなくても楽なやり方があるだろ。」
銀髪を抑え、ため息をもらした・・
「そこから説明すんのかよ・・ＮＢＴはナインポインツの各チーム代表を出場する。それ以外に一般枠ってのが二つあって一つは予選をし、約五百分の一の男になり本戦に出場する。もう一つは金で権利を買うかだがそのもう抑えてえてある。タンは・・」

車のエンジンをかけた。
「いーか・てめーは・トーナメントで・タンを・殺る。報酬は前５千ドルの成功後１０万ドル。キャッシュだ。プラス・内の私兵団の団長にもしてやるって話だ。明日も印刷工場で腐る日々か。やらねー手はないだろ。」
アクセルを吹かし・
「悪い話じゃねーな・・私兵団ってのはいらねーがキャッシュだ。だがその話もスネークがいねーとな。」
「そのスネークが俺に話を聞けって言ったんだぜ。」
「・・俺は用心深いんだ。うさんくせー銀髪じゃ話にならねー。」
セブンは肩を竦め、携帯を助手席に放り投げた。
「それもって失せな。詳しいことは明日スネークから聞けばいい。」
めんどくさくなったのか、銀髪を掻き分けながらカウンターの方に向かいマスターに酒を注文していた。年代物の骨董品に着いてるアクセルを踏み、カートルームを後にした。バタン・・西部風の扉が開き銀髪が走り寄るのがバックミラーに写る。
「ていうか・・ここ何処だと思ってんだ。乗せてけよ・・・マジかよ、クソ。」
銀髪は届くはずも無い石と罵声をなげていた。ナインポインツに向かう林道、ちょっと走るとハマ湖が見えてきた。普段は自然なんて気にもしないが、星の写る水面はありきたりの言葉だが宝石箱の様だ。俺は二度と輝きを失う人生を送りたくない・・ＰＭ１０：００・・ラジオはＡＭ、つけるくらいなら安いエンジン音を聞いてた方がまし。ヘッドライトの明かりが道を照らしナインポインツを引き寄せる様に車は加速度を増した。

過去を振り返ってもうんざりするだけ
ホントにそれだけ・・きっと良い思い出ってのは消えて行くものだから
見ろよ・・ネズミが一匹わめいてる

５０セントしか持ってない男に死神の姿を写し
車輪を回す様にお馴染みの命乞い
ＫＫＫのドラマ・・チンケなアジア人
泣きたいのは俺も同じ
もう過ちを繰り返すのは止めにしたいんだ・・
親はゴシップ記事か暴力番組を見る眼つき
ストリートで自分を罵る言葉・・カス・・サッグ・・ファック
無力な死人は叫ぶ声すら聞こえない
アイアンメイデイで脳みそを串刺しにしたかの如く、突き刺さった
固定観念
ただ引き金を引く
遥か昔のおとぎ話・・悪魔の瞳に涙が溢れ、三日月の光も絶えた。
女神との約束は足枷になり、混乱の渦にのまれし鎮魂なる首輪を身
に付けさ迷う亡霊
アラームが言うんだ
さっさと起きやがれ。うすのろ共。
クソゾンビ見たいにうろつきやがって
俺の考えは間違ってる・・だからブルドック面をアスファルトに叩
き付け
煉獄の様な毎日に終わりを告げた
まだ１５時だってのに実家に行き、当ても無くハイウェイに乗った
トランクにはゴミ袋・・住む場所を失った男に宛がった車１９９４
年式クラウン
俺はまだラッキーな方だろ
クソみたいな人生だと言ってみろ・・落ちぶれ方も半端じゃねーだろ
クソみたいな気分にはもうならないぜ・・
あとはのし上がるだけだから

第一章　三幕　Grill&Tongue

一本の電話が鳴り、蛇の思考は回転した。
「はい・・」
「タンだ・・怪しい動きをしたらウェザードを殺す・・・状況は把握できたか・・」
「・・あぁ・・」
「ナインポインツへ向かえ・・一人でな・・」
・・・
「分かった・・」
言い終わる前に電話は切れた。
ウェザード・・元ブルーイナフの６番目。
サーティーンと同じ戦闘タイプの能力・・生粋のガンファイター・・舌を切られた仲間。
清春にはまだ伝えないでおいた方がいいだろう。昔の仲間が捕まった何て聞いたらな・・まだナインポインツの力関係も知らないだろう。
「悪いがタイムアップだ。詳しい話は副社長から聞いてくれ。」
ホイルスピン・・・
工場で会った時は目を疑った。ブルーイナフの悪魔が思慮深く悲しい目をしていた。俺は初めて清春に会った時、目を見て思った。殺される・・
だけど、お前は変わった。ブルーイナフの仲間がお前を狂気の呪縛からといたんだと、俺は勝手に思ってる。俺も何回もお前に救われた・・そういえばあの時の彼女とはどうなたんだ。久しぶりに会ったってのにビジネスの話しか出来なかった。「俺が結婚・・そんな冗談笑えねーな。」なんて最高の助言を鼻で笑いやがって。いつもは音楽やエンジン音が俺を落ち着かせたが今は違う。車内はやたら静かだ・・速度は８０マイル・・林道を抜けハマ湖が見えた。「綺

麗だ・・」運命に流されるのも有りって思えるくらい・・だが運命は予測を裏切る・・今日は久しぶりに第六感と蛇の思考が一致した・・

俺は今日・・死ぬ・・

おもむろに携帯を取り・・

「俺だ・・今日は帰らない・・」

「・・あなた・・」

「最後にエリカの声を聞かせてくれよ・・」

キャッチ・・タンの番号。

「せっかちな奴だ・・じゃあな・・元気で・・」

ピッ・・

サイドミラーに黒塗りのベンツがうっすら写る光漏らし・・追尾。

「車を林の中に止めろ・・」

また切れた。タンてのは舌足らずのことなのか。キャデラックの車体を擦りながら林道の中を進むと湖の浜辺に着いた。

ピッタリとくっついて着ていたベンツの止まりヘッドライトを向けたまま運転席側のドアが開いた。愛銃＝デザートイーグルを両手で握り息を潜める・・バックミラーに写るタンの姿・・

「清春・・いくらお前でもこいつはきついかもな・・」

２メートル以上ありそうな大男・・スキンヘッド・・片手にはショットガン・・俺が握る銃ぐらいに見える・・歩み寄る。

唾を飲む・・タンの気配に飲み込まれる。

・・助手席に人影・・ウィザード・・抉れた横顔＝キレる

「タン！くたばりやがれーーー！！！」

振り返りざまの連射・・キャデラックのガラスごと打ち抜く４５口径・・７発中５発ＨＩＴ。息を切らす蛇・・ドミノの様に倒れた大男・・でかいため息。

「クソ・・愛車に穴が開いちまった・・」

あとはスキンヘッドに一発喰らわすだけ、六感やら思考やらは大きな勘違いですむ。撃鉄を起こしキャデのドアを勢いよく開け、湿っ

ぽい土に足を付けた。
ドォーン・・ガッシャ・・
１２ゲージショットシェルの炸裂音・・リロード。
「あぁぁぁぁ・・ッファック・・」
蛇の悲鳴・・吹っ飛んでいった左足・・転がり落ちながらタンに銃を向けた・・
ドォーン・・ガッシャ・・
機械の様に正確に、戦闘に関してタンは何枚か上手だった。
無くなった右手とデザートイーグルを見ながら言葉にならない叫びを上げ土砂をのた打ち回っている・・踏み潰された蛇のように。さらに追撃・・残りの足も吹っ飛ばした・・
リロード。防弾着にへばり付いた弾を払いながらも、何事もなかったかの様な無表情・・もがく蛇を上から眺めながらショットガンを突付けた。
「グリルが呼んでる。来てもらうぞ。」
蛇は痛みで震える声を出した。
「カミングアウトしてやる・・」
無表情に見下ろすままだ。
「俺はこう見えてＭなんだ。てめーはいたぶらずに殺してやるよ。」
ニヤリと笑い。ショットガンを振りかぶり顔面へフルスイング・・
強制的に意識を飛ばされた。タンは忠実にグリルからの指令を全うし最後にキャデラックにウィザードを乗せ湖に沈めた・・・

翌日

「スネークか。」
朝っぱらからの着信音。十数件の履歴＝メッセージ。投げ捨てたい衝動に駆られながらでてみると甲高いセブンの声・・
「俺だよ。七つの頭脳を持つ男。セブンだ。」

「はぁ・・朝からお前のテンションはさすがにきついな。」
「何言ってんだ。もう１１時だぞ。」
マジだ・・
「ていうか、スネークが電話にでねーんだ。」
「おいおい、てめーは今頃思春期かよ。スネークが電話にでないぐらいでなんなんだよカマ野朗。」
「てめー・・タンのことは昨日話したよな。俺の作った携帯には発信が着いてるんだ。タンはグリルの右腕だ」
「グリル。オルガニズムのトップ。ナインポインツのイーストダウンタンの支配者か。」
「以外と知ってるじゃねーかよ。なら、話が早いそのビルの一角からスネークの携帯が電波を発してる・・分かるか。」
「さらわれたのか。」
「恐らくカートルームで別れたあとすぐに。さっきスネークの奥さんだかなんだか来て、昨日の夜、最後に娘の声を聞かせてくれって電話があったそうだ。だから早く会社に着てくれ。」
こいつ切りやがった・・発信機、よりいっそう投げ捨てたい騒動に駆られたが、スネークのことが気になる。会社＝スネークヘッズのアジトだが場所は知らない。
P、P、P、・・メールだ。アジトまでの地図が添付されていた。
「はいはい・・ったく気が利くこった。」
スネークが支配する街。にぎやかでいいがスラムみたいな赤レンガが並ぶ中心街。ストリートチルドレンがうろつき、中年はうなだれている。ここで息を吹き返すのは若い奴らだけらしい。ボロ車で通り抜けるメインストリート。引ったくり、かつ上げ、売人が視界の中に横通る。
「はっ。ミホ。」
車を止め・・フリーズ。
「えっ・・清春・・」
工場に入る前、俺はミホと一緒に住んでいた。ミホは澄んだブルー

の瞳で少女の様な笑顔をしている。ナインポインツの一つ・・元だが・・ウエスト・ウッド・ウィッチのメンバーだったらしいが、俺はその頃を知らないがミホの左腕にはＷＷＷのタトゥー。その時の通り名はＢｒｕｔａｌ　Ｗｉｔｃｈ・・残忍な魔女。
いきなり殴られても当然なことをした俺にいつもの笑顔で接してくれた。
「清春。何処行ってたの。いきなり帰ってこないんだもん。」
俺はそれに答えられなかった。やっと自分の探してた答えが見つかった・・とは言えなかった。ミホとの生活・・このまま一緒にいればきっと・・。だけど俺の求める女神との約束は果たされぬまま。
「悪い。ミホは何してんだ。」
「私は・・サイレントキラーの魔女狩りって知ってる。」
サイレントキラーの魔女狩り・・ブルーイナフと並ぶ、噂の事件。ウエスト・ウッド・ウィッチのメンバー３８人・・惨殺された３６人のバラバラにされたパーツがブラットバンクにまかれていたって話。生き残ったのはミホと、バラバラのパーツを組み合わせても出て来なかった、消えたもう一人の女。と、されている吐きたくなる様な事件。
「あぁ、噂で聞いてたけど。」
「犯人を・・追ってるの。」
「はっ。そんなの警察にでも任せておけよ。」
「・・・私は友達を殺されたの・・この辛さが清春なら分かるでしょ・・あっ・・ごめん。」
一瞬、人形の様な冷たい顔をしたが、謝る姿はいつものミホだった。
ＰＰＰ・ＰＰＰ・ＰＰＰ
携帯が鳴っていた。こんな時に・・ミホは驚いた様子で言った。
「携帯待たないっていってたくせにぃ。」
「あっ。これ、仕事で一時的に持たされてるだけ。」
「ふーん。」
ピッ・・セブンの怒鳴り声。

「清春。そんなトコで何やってんだよ。早くこいよー。」
ピ・・GPSめ。
「えっ・・いいの。」
クスクスと笑うミホ。「ちょっとかして。」俺から携帯を取り打ち始めた。
「はいこれ。私の番号入れといたから。いつでもかけてね。」
PPP・PPP・PPP・PPP・・
「お友達呼んでるよ。」
「お友達。こいつが・・吐き気がする。」
「はいはい・・やっと出来たお友達でしょ早く行ってあげなよ。」
「だから・・」
ミホは俺を車に押しこみながら
「もしも・・犯人追ってて危なくなったら、助けに着てね。」
「・・あぁ・・白馬の王子様とはいかないけどな。」
ボロ車をポンと叩いた。ミホはまた笑った。
「相変わらずセリフがくさいんだね。」
ミホといると調子が狂う・・くさいセリフのいい訳じゃない、ずっと抱えてきたものが軽くなり・・消えて無くなってしまいそうだから。
「じゃあ、またな・・」

PM2：00

「結局、着ちまったな。」
ブラックマンバのアジト。一つだけ浮いた24階建てのビル。一階には受付があり、ナインポインツ内ではめったに御目に掛かれないビジネスマンのポーカーフェイスが並ぶ。
「セブンに呼ばれてきたんだが。」
受付嬢は上目遣いで答えた。
「アポイトメントはお取りですか。」

アポを取るような男に見えるのか・・俺の態度と服装じゃ警備員に摘み出されてもおかしくない。見るからに軍人崩れの警備員が睨みを利かしピンマイクで連絡を取っている。伝言―伝言―伝言。受付の内線がなった「少々お待ちください」。受付嬢はうなずき。
「清春様。どうぞ、案内の者とあちらの社長室直通のエレベーターにお乗りください。」
ボディーガードが二名、同行しエレベーターは２４階へ向かった。
ピンポーン・・
エレベーターが開き、真正面に立つ銀髪が手を広げながら歓迎。
「ウェルカーム。」
こいつ・・酔ってやがる・・
銀髪のボディーを撃ち、酒が散乱しているテーブルに叩き付けた。
「ちょ・・ま、待て・・」
「いいか・・お前の酒くせー息を嗅ぎながらヒステリーに付き合ってられるほど暇じゃねーんよ・・。」
ボディーガードは警棒を抜いたが、首筋に突きつけられた酒瓶に戦意喪失した。
「清春。スネークと連絡が取れないのはマジなんだ・・くそ・・いってぇ」
腹を摩りながらヨロヨロとボディーガードに近づき「この役立たず共が、てめーらクビだ。」
エレベーターに蹴り倒し一階に送った。
「受付の女いたろ。あいつは俺の女だから手ぇだすなよぉ。最初はやりたくて犯したんだけどさー、今じゃセブン早く入れてって。哀願してくるようになってさー、調教のしがいがあるってもんだろ。」
「・・お前の頭ん中どうなってんだ。一分前には俺に痛めつけられて、スネークの話をし始めたんじゃないのか・・懲りない奴だ。」
ボキボキ・・拳を鳴らす・・分かりやすく安い威嚇。
「待て待て・・てめーは一日何回暴力で訴えるんだ。ったく・・着いてきな。」

連れられて入った場所は副社長室と書かれ、スピーカーからはザー、と雑音の様な音が流れ、何に使うか分からないが基盤やらガラクタが山の様に積んである。コレクションらしき棚・・ゴチャゴチャした机に・・7台のＰＣ。
「これが7つの頭脳を持つ男の正体か。」
「7つの内に一つだぜベイビー。」
「はっ・・。」
よく見ると改造中の携帯が置いてあった。
「俺が持ってをのもこんななったんのか。」
「イエース。セブン特製モデルだぁ。暴力馬鹿にも分かりやすく説明してやるよ。」
「ＧＰＳの他になんか付いてんのか。」
俺は携帯をへし折るモーションをとった。
「ば・・ふざけんな・・いいか。まず、二つの専用ダイヤルからかけられる。１つはアクセスすれば周りの音を高性能マイクで拾うことができる。これはさっきからスネークにアクセスし続けてるが、目立った反応なしだ。」
「ストーカーかよ。当然、俺のにも付いてんだろ。」
「男のプライベートなんて興味ねーから安心しな。」
「もう一つはデータの消去。まだあるんだぜ。」
「もういい。で、スピーカーから流れてるこの音がスネークの状況を捕まえられるかもっってことだろ。」
「ご名答」って感じで、銀髪は指を弾いた。
「要するに、俺呼んだのはＮＢＴの話は後回し。グリルの支配下に潜入し、００７の様にスネークを連れ戻す。」
パチン・・「グゥッド。スネークはナインポインツの一角だぞ。捕まってたら警備体制も半端じゃない。かといってオルガニズムは話し合いにおおじる連中じゃない。殺り合っても頭を潰されたら蛇は終わりだ。」
「そこで、元工場作業員のおでましか。潜入のプロを雇った方がい

いだろ。」
「元ブルーイナフのサーティーンだろ。ビジだ・・頼む・・スネークを・・助けてくれ。」
頭を下げる銀髪・・
「わーったよ。俺は高いぜビジネスマン。」
ニヤっと笑い
パチ・パチン・・「その調子だぜ。サーティーン。」
「実際問題、携帯があるってだけでスネークはそのビルにいるのかよ。」
「分からねー・・けど、手掛かりはこれだけだ。」
ガッチャ・・
「えっ・・」セブンと顔を見合わせた・・
確かにスピーカーから聞こえた・・
「そろそろ薬も切れる頃よね・・」
パン・・
「ん・・・く・・てめー・・・・俺が誰だか分かってんだろーな・・・」
スネークの声だ・・・「セブン・・」「シィ・・バイトしたぜ」
「始めまして・・・私がグリルよ。」

俺は視界を奪われていた・・
潰されたのか・・
パニックで妙な戯言をほざいたが・・ついさっき、俺はタンに・・
思ったよりも痛みはない。が、身体が寒い・・ここは何処なんだ・・
・・クソ・・
どうなってやがる・・・
・・グリル・・
パン・・頬に感じる二度目の衝撃

「早く起きなさいおデブちゃん。」
・・グリル・・
「・・目が覚めたぜ。まぁ、何も見えないけどな。」
「たいした度胸ね。さすがは元セカンドってとこかしら。」
声の方向に手を伸ばしたが空を切る・・感覚がおかしい。
「手も付いてないのに掴もうとしちゃってかわいいはねボーヤ。」
ちぃ・・
「グリル・・俺は第一印象で人の性格を見抜くのが上手いんだ。ギャンブルが得意でね・・ポーカーで勝つには見えない相手の心理を覗くことが重要だ。」
「へー。僕の性格・・当ててごらんよ。」
「お前は変態なエゴイスト、サディストなゲイで、人前に姿を現せないほど不細工な臆病者だ・・へへ・・当たってんだろ。」
腹を蹴る・・飛び散る唾液・・髪を掴み・・耳元で囁く
・・甘い香り・・この匂い・・どっかで・・
「君すごいねー当たってるよ。だけど、不細工と臆病者は違うな・・僕の姿を見た人は焼死体になる・・グリルの由来だよ。」
聞いたことがあった・・
「ナインポインツの奴らは口を揃えて同じ事を言う。グリルと会った絶対に顔は見るな。生きたまま焼かれるぞってな。」
「よく知ってるねー。」
甘い香りを漂わせながらこつんこつんと俺の周りを歩いている・・
「なら、早くお家に帰らせてくれないか・・かわいいアバズレが俺の帰りを待ってるんだ」
グリルの足音は止まなかった。その代わり高らかな笑い声が木霊した・・どうやら狭い所にいるらしい・・・逃げる気なんてさらさらないがな。
それまでしていた音が一切消え、冷たい銃口が突きつけられた。
「蛇の道は蛇・・殺りな・・」
「潔い子は嫌いじゃないよ。最後にいい事教えてあげるよ・・次の

玩具は君の友達・・ブルーイナフの１３番目してあげる」
「て・てめー俺の仲間にこれ以上手ぇだしたら・・」
倒れたのか最初からこうだったのか分からないが言葉を遮られた。
乾いた炸裂音・・銃のスライド＆薬莢の跳ねる音・・甘い香りと硝煙・・血の匂いが混ざり合う・・
思い出したぜ・・この香り・・蛇の道は蛇・・か。スネークと名乗った時からこうなることは覚悟の上だった。クソ・・俺は昔からあまいんだよ。大切なものを捨てない限り、俺はセカンドのまま・・ファーストに言われた言葉。ここが俺の限界かもな・・だけど、もしも願いが叶うなら、ブルーイナフの頃に戻りてーな・・楽しかったあの頃に。
ダン、ダン、ダン、ダン、・・
「くぅ・・だけどな・・清春・・まだ・・てめーはこっちに来んじゃねーぞ・・」
「しぶといねー」
ダン、、、カラン・・・

第一章　四幕　Miho&Fischerreyes

ＰＭ７：５０　Ｓｕｎｄａｙ

Ｅｇｇ－ｐｏｋｅｒ・・ブラックマンバの支配下にあるＣＬＵＢ
暗闇を彩るネオン＆ミュージック。踊り狂う烏合の衆、大理石のテーブルに並ぶカード＆ドラック。毎晩飽きもせず繰り広げられる欲の縮図。カウンターで酒を食らうロト・フィッシャーレイズ。短髪をブルー＆ゴールドのアシンメトリーにきめ、舌＆鼻＆瞼＆全体にボディーピアスをしギターケイスにライフルという下手な形の殺し屋。その横で髭面を手で撫でながら踊るアバズレを食い入る様な目で追いかけているのが弟のダニエル。職業は兄達と同様・・名も無き街に代々居据わる殺し屋＝フィッシャーレイズ家。
ロトはお気に入りのジンをあおりながら告げた。
「ダニエル・・聞いたか。ＮＢＴに出場するマンバの代表が決まるとよ」
ウォッカを一気に流し込みドンとテーブルに置いた。
「殺るのか兄貴」
ロトはクビを振りアシンメトリーにハットを被せた。
「余興ってもんを楽しもうぜ」
「余興ね。へへ・・わざわざ蛇の縄張りに来て女漁らずに仕事だけってのもつまらねーよな・・へへ・・俺はナインポインツの争いなんて興味ねーからよ」
「へへ」って癖を注意しロトはジンのボトルをダニエルの頭に叩きつけた。髭を撫でる様に殴られた頭を撫でる。これは日常茶飯事の出来事・・
「頼むぜ兄弟・・ＮＢＴにはタンも出るんだ。あいつの敵を俺らが始末する・・ママの言い付けだろ」
「ママはタンを一番愛してるからな・・へへ・・俺は兄弟の中で一

番タンが嫌いなんだよ。無口なツルッパゲめ・・ママの舌まで食いやがって・・ウィザードって野朗をさらった時の事、覚えてるよな」
黒のドレスシャツを捲り、腹に残った二発の弾傷を指で弾く。
「あのガンファイターただ者じゃなかったな・・さすがは元ブルーイナフってとこか」
「へへ・・俺ら兄弟五人がかりでやっと捕まえたんだ・・」
「その代償にジャッカスとルーチが逝っちまった。」
「なぁ兄貴・・タンがあいつの舌を切り取り食っちまうとこ見たろ・・ママのもあーして食ったんだぜ・・俺はあいつが許せねー」
「ダニエル・・・ダニエルよ・・ママの舌を食ってからだ。タンがママに一番愛される様になったのは・・」
「兄貴がマザコンでタンは助かったな」
「明日はそのタンから高額な仕事が入ってるんだ。文句言うなって」
「タンの仕事はグリルが絡んでんだろ。まぁ・・相手はサティーンだからな・・もう八年も経つかな、借り返すついでに金も貰えんだ。ラッキーだぜ・・へへ」
「あぁ・・そうだな」
メインフロアを照らすネオン&ミュージックが止み、敵艦に囲まれた潜水艦が写すソナーの様にポツリポツリとざわめき始めた。スポットライトがエッグポーカー専属MCに当てられる。
「レディース&ジェントルメン。玉無しにアバズレ共め・・」
酷いブーイング・・MCを取り囲む様に人柱の即席リングへ変化していく玉無しにアバズレ。歪な円の中には3人の男がいる。
「今日はブラックマンバの最強を決める日だ。傭兵もクソも関係ねー。勝てば金も権力も一夜にして手に入る最高に夜・・ナインポインツ主催のネオブラットトーナメントに代表として出場できる天国のフライト付きだ」
闇に蠢く蛇共は狂気の雄叫びをあげた。再びネオン&ミュージックが混血のスコールの様にメインフロアに降り注ぎ、フロアを取り巻く鼓動のリミットをぶっちぎる。その中で虎と龍が如く睨み合う蛇。

一食即発・・仕切るのは俺だと言わんばかりにＭＣが割ってはいる。
「ヘイ。スキット調子はどうだ。」
黒色の肌にドレットの軍隊上がりの傭兵・・・スキット
「悪くねーな、それよりアバッキオの心配してやれ、顔色わるいぜ・・ちびって声も出ないんじゃねーか」
「アバッキオ。こいつやる気１２０％だぜ」
マンバの私兵団隊長。ストリート育ちのフリースタイル・・アバッキオ
「そろそろ片付けねーとな。マンバの牙って名は2人もいらねーだろ」
「イャー。今日は超満員３００人ギャラリーだ。好きに暴れろ蛇共・・Ａｒｅ ｔｈｅ ｐｒｅｐａｒａｔｉｏｎｓ ｇｏｏｄ・・ＣＯＭＥ ＯＮ！」
骨が軋む音はギャラリーのアドレナリンを沸騰させた。
「へへ。兄貴どっちに賭ける」
「俺はスキットに１００ドルだ。あいつ相当強いぜ・・」
「じゃ、俺はアバッキオだ・・」
「正気か。あんなチンピラじゃもらったも同然・・ダニエル、どうした」
「あの女・・どっかで・・あっ、ブルートルウィッチ」
「あの残忍なビッチか・・おい、スキット、てめー立て・・聞こえねーのか・・雑魚、立てっ言ってんだろーが・・よし・・」
「兄貴、俺ちょっと行ってくるぜ」
「なに・・もうすぐ狩りの時間だぞ」
「その前に魔女狩りだよ」
ミホは流れるリングに流れる血を怪しげに見つめていた。灼熱の砂漠の中、オアシスの幻影を見るかの様に眺め「残忍な魔女には物足りないんじゃないのか」と、男に声をかけられ「あら・・私を知っているのね」すでに誘惑する眼つきに変わっている。
ダニエルは髭に手を当てながらにニヤける口元を覆った。

「ＷＷＷのタトゥーにこんないい女だ。一度見たら忘れないぜ。まぁ手配書で見ただけだけどな・・へへ」
「手配書に写る私を見てやりたいと思ったでしょ」
「随分ストレートだな。チームが解散して娼婦に成り下がったってのはホントだったのか・・へへ・・へへへ」
ミホは掌に指を二本足し微笑む。ダニエルの財布の中身は６００ドルだがアバッキオが勝てばロトから１００ドル入ることで成立した。
トイレに向かう途中、ダニエルはロトにニヤリと笑ってみせた。
「あのドＭめ・・魔女に切り刻まれろ・・・おい、スキットまた同じパターンにハマりやがって・・クソ」ダニエルがトイレに消えていくと同士にスキットはダウン、勝負は決まったようだ。
「クソ・・１００ドル損したぜ。」
ロトはカウンターにコインを弾くと懐から銃を抜きバーテンダーの額を打ち抜き、ギターケースを悲鳴＆パニックのギャラリー無視でゆっくり開きアサルトライフルを手にアバッキオまでの道に乱射・・命中・・無数の鉛を喰らい穴だらけの勝者・・それをダウンしているスキットが見つめる・・バウンサーは一瞬で蜂の巣・・フロアに残るのはスキット＆ロト＆死体・・スキットを見下ろし銃向ける。
「てめー、何の為に・・誰に雇われた・・」
「全てはフィッシャーレイズ家の為に」
ダダダダダ・・・

「キスも無しかよ」
「ダメ、先に払ってくれないと・・」
「なぁもういいだろ」ダニエルは財布を出した。
「わかった気持ちよくしてあげるから目をつぶって・・」
舌が絡み合った・・様にミホの手はダニエルの喉笛近くまで行き
「ん・・」
「どお・・気持ちいい」
魔女はどんな魔法を使ったのかワンタッチで顎を外した

「んんん・・」
「じゃね、お猿さん」
ミホがトイレから出てきたのは丁度スキットが撃たれたあとだった。
「・・・何よこれ・・・」
ロトはミホを見て目を覆った・・「ダニエル・・早漏か・・」
ミホは１００ドルの件を話した
「さすがブルートルウィッチだな。この状況で１００ドル請求できるか・・気に入ったぜ。」
札を掴みフロアを後に・・「ふぅ・・」
「ダニエール・・ダニエール・・・・・」
トイレに蹲っているダニエル・・「どうしたダニエル・・はは・・分かったぜ、アソコ舐めてたら外れちまったんだな・・うけるぜ兄弟」
「んーーー、んーーーーー」
「ママが見たら泣くぞ・・・」

第一章　終幕　Thirteen&Michel

ＰＭ３：１５　Ｍｏｎｄａｙ

「マジかよスネーク・・」セブンはスピーカーから聞こえる銃声に身体を震わせながら呆然と座り込んだ。怒りよりも恐怖で震えてる様に見える。俺はコレクションの棚にガシャンと手を突っ込み引抜いた。

「これでいい・・」

「・・は、何言ってんだよ・・」

「御宅の社長の仇を取るんだろ。ナイフ一本なら安いもんだ。」

「無理だ・・昨日・・エッグポーカーでうちの私兵団隊長と実力者達がやられた。援護は無いに等しいお前一人で何ができんだよ」床を殴り銀髪をかき上げ「クソ・・お終いだ」・・「セブンそのビルまでのナビを頼む・・」それを尻目にエレベーターに乗り一回へ向かった・・怒り・殺意・・僅かな恐怖を見えな敵に感じながらの頭に過ぎるグリルの噂・・オカルト・・サイコパス・・セル・・「気味の悪い野朗だ」恐れを吐き出すかの様に・・・一階自動ドアが開いた。普段と変わらないであろうビジネスをこなしている社員。ナイフを片手持つ男に警備員が反応。しかし、取り押さえる気は無いようだ・・「清春様・・副社長が話があるそうです」・・「はっ」・・キーン・・エレベーターが開いた。

「清春ぅ。俺をパーティーに連れてかないなんてドンペリ抜きの墓参りだぜ」

「また・・お早い復活だなセブン・・」

俺は車へ走りセブンは受付の元へ走った。呼び止めたが聞いちゃいない・・

今にも泣きそうな面を作り愛人と語っていた受付嬢に訴えかけた。

「もし・・俺が死んじゃってもさー。泣かないでくれよベイビー」

カウンターに身を乗り出し、女の前髪を撫でる様に耳の裏まで指を走らせた。モデル並みに整った顔はバツの悪そうな表情を浮かべている。
「セブン！」
二度目は強い口調で警告した。どうしたらそんな気分をコロコロ変えられるのか不思議だったが、さっきまでの怒りや恐怖に身を任している状態が嘘の様に冷静さを取り戻せている・・銀髪は背中をビクっとさせたが、一人で別れを惜しんでる様子。受付嬢は予めプログラムされている機械の様なしなやかさで、空気を読み違えてる男に言い放った。
「いってらっしゃいませ・・」
助手席のシートにナイフを突き刺す、アタッシュケースをボンと叩きガバメントを取り出し弾のチェック。マガジンスペアをデニムに詰め込み、蟹股で走るセブン・・エンジンを掛ける「ＣＯＯＬに行こうぜ・・」助手席のドアが開くや叫び声が響いた。
「少しは待てって。もう二度と会えないかも知れないんだぞ・・」
「はん・・お前にそんな気があったなんて知らなかった」
「て、お前このナイフ・・どんだけ価値があると思ってんだ。連続殺人鬼ブロンクス・ビーバーの愛用品、１９６４年イギリスのディビット・フィーチャー伯爵のＤＮＡ鑑定書付きのプレミア物なんだぞ・・ちくしょう・・」
「どうせ盗んだんだろ。それに今はもう俺のナイフだろ。プレミア付けてもいいぜ」
「馬鹿か・・」
セブンはナイフを引き抜き静かにそれを後ろの座席に置いた。そして携帯をとりだしモニターを操作して「マジで死んじゃったらどうしようかなー・・七つの頭脳を持つ男＆副社長のレッテル天国に持ってけねーかなー」なんて図々しい独り言を吐きながら携帯のキーを弄くり倒している。
「あっ。取り合えづまっすぐね運転手さん」

肺まで浸み込んで来そうな毒を吐き出したかたが相手にしたくなかった。
「そのビルはどのくらいで着きそうなんだ」
「待てって。お前ホントせっかちだな、設計をハッキングしてんだよ・・ＯＫ。早くて４７分・・スネークが居た部屋は５１３号室」
居た・・疑問に思ったがセブンに言わせれば死体はもういないことになるのかも知れない。携帯のモニターを覗くと立体模型が写しだされていた。
「グリルがノコノコとビルに留まっててくれればいいんだがな」
「あぁこいつを始末しちまえばマンバが潰れる確立が格段に減るからな・・スネークの意思はあの会社に残そうぜ」
「たまには良い事言うじゃねーかチンピラ」
「俺は良い事しか言わねーよ・・・単純馬鹿」
車はオルガニズムの支配下に入った。ダウンタウンは嵐の前の静さ包括させるほど人が見当たらなかったが、粘々とした覗くような視線が纏わり付く・・スネークの囚われているビル・・ビルとは名ばかりで正面玄関は悪装飾が付いた大きな柱・・今にも動き出しそうなガーゴイルの像・・神殿の様な外壁・・どれをとっても悪趣味の一言。ついでに俺の隣で不思議な呪文を唱えてる奴がいる。
「お祈りは済んだか・・」
「ちょ・・話しかけんなよ・・神よ死者の魂はあなたの糧に、ワイングラスに注ぐ紅、野獣の遺伝子は四角い皿へ・・サキュバス・ディアボロス・・」
「はぁ・・いいか、サキュバス・ディアボロスもここにはいねー、いるのはサイコパス・・グリルってイカれた人間だろ」
セブンはガッカリしたよ様に言った。
「いいじゃねーか。この方が雰囲気でんだろ」
「スネークが死んだなんて思いたくねーが、俺らはリベンジャーだろ・・」
「復讐劇も俺流なんだよ、分かってねーなー」

「キャラが濃すぎんだよ・・」と、ため息をつく。深呼吸をする要領で高ぶる感情を和らげた。ウザイがこいつのペースに合わせてやるかって感じになってくる・・ガバメント&ブロンクスナイフを手に・・

「パーティーの始まりだぜ」

「清春ぅ。ノッてきたじゃんか」

オートロック付き正面玄関のガラスをセブンは迷わず鉛玉で粉砕した。明らかに一般人ではない男がその音に気付き出てきたがセブンに銃を向けられ硬直・・グリップで眠らされた。「意外とやるじゃねーか。」銀髪は決める様なポーズ・・・。一階はロビーになっている。中はやはりビルというよりホテルみたいな作りで薄暗さで洋館の様にも思える。五階へあがるエレベーターもレトロな感じの物が二箇所。シャッターで閉めるだけで各階のオープンスペースが眺められる仕組みだが、各階を通り過ぎるにつれ銀髪に似た悪魔崇拝者らしき奴らが舐める様に下から上へと青白い顔の黒フードを被った男が数人俺達を見ている・・

「セブン・・お友達か」

「冗談だろ」って顔で首を横に振った。そして、「これって・・罠・・じゃないよな・・対応が早すぎるもんな。ただのジャンキーの集まりさ・・」

「・・・鬼が出るか蛇が出るかってな」

五階フロア。このフロアだけ何処からか音楽が掛かっている・・シャッターを開き踏み出すと黒フードの集団が居たがジャンキーの様にただうな垂れているだけ・・1、2、3・・全部で8人・・待ち伏せしていた・・って分でも無さそうなノリ。513号室を探す。赤と黒の幾何学的なデザインのカーペットが二股に伸びている。間にはガラス張りの吹き抜け。絡みつく視線の中、トカレフ&ブロンクスナイフを再度構えて左へ進む・・第六感。セブンは黒フードの一人に銃を突きつけ大声で罵しっている。それを嘲笑う16個の目・・

「ちぃ、気持ちわりぃ奴らだなー。おい、５１３号はどっちだ」
青白い顔を上げ、ゆっくりと清春が進んだ方向を指差した。
５０８・・５０９・・５１０・・近づくに連れ音量を増す音楽。５１１・・５１２・・５１３・・ここから音楽が鳴ってる様だ・・・
セブンは唾を飲んだ。
「やっぱ・・罠か、舐めやがって・・」
ドアノブに手を掛け、ゆっくり回す・・開いている・・セブンに目で合図をした。ガチャン・・勢い良く飛び込んで行った「命の保障はしないぜ・・」一歩遅れて入ったがセブンは音楽の鳴る部屋まで一直線に向かったらしい・・「清春！」微かに残る死臭・・各部屋をざっと見ながらセブンの元に急いだ。そこにはコンポ・スネークの携帯・手錠で繋がれた少女がいた。
「清春。何だこのガキ・・グリルってのはこっちの趣味もあんのかよ・・それに携帯だけでスネークの・・・居ねーし」
死体と言おうとしてためらったみたいだ・・とりあえず、耳障りなロックを止めようと消した、と同時に何かを読み込みだした。
・・・始めましてサーティーン・・・グリルよ・・・
銀髪はコンポに銃を向けた。
「おちょくってくれるじゃん変態野朗が・・」
「止せ・・手掛かりかも」
・・・聞いてたと思うけど・・蛇の頭は潰れたわよ・・・
・・・ふふふ・・あなたが考えてることはスネークのことよ・・答えはその子が持ってるわ・・それに貴方が来ることが何故分かったか・・疑問よね・・考えることはないわ・・悪魔が喜ぶゲームなの、シュチエーションもバッチリでしょ・・ブルーイナフの悪魔と呼ばれた男・・サーティーン・・・これは私からの招待状よ・・思う存分楽しんで頂戴・・一つだけ攻略のヒントをあげるわ・・あなたにとってその子が全てになる・・では、死のゲームをご堪能あれ・・
ふふふふふ・・ふふ・・ふぅひゃっひゃひゃひゃひゃひゃひゃ
ダンダンダン・・・俺はコンポは粉砕した「ゲームだと、ふざけや

あって。出て来いイタチ野朗・・ビビッて姿も出せねー癖によ」セブンも続いた「その通りだ腰抜けめ・・」・・・空しく響く声・・
「う・・・ぅんん」少女が目を覚ました様だ。その瞳は徐々に光を取り込んで行きやがて羽を開く様に綺麗な瞳が現れた。すべての罪を洗い流してくれる・・そんな気さえするその瞳の奥は誰かに似ている・・女神との約束・・俺の全て・・か・・この子が俺の全てになる・・・
「清春ぅ・・てめーの大事な全てってのが起きたぞ。まさかな・・ロリコンだったなんて以外だったけど」
「俺にそんな趣味ねーよ・・グリルって野朗もホラ吹くならもっとマシな事言えよ」
「・・・おじさん達・・誰・・」
「おーじーさーんだーー。クソガキィ、お兄さんだろーがぶっ殺すぞ。アァ！・・・ていうかさっきのさー俺のことまったく眼中になかったよね。盗聴されてたのか裏切られたのか知らねーけど、俺の存在まったくここに居ないよね。マジＦＵＣＫだぜ」
俺の全てっての考えるのは後回しだ・・スネーク・・
「なぁ。何か渡された物はないか」
「分からない・・・外で遊んでて・・気がついたら・・お兄さん達が居たから」
少女は繋がれて無い方の手でポケットの中を探した。
「あっ。これ・・」
一通の封筒。少女は伏目がちにそれを渡しす。封筒を開けながら質問した。
「名前は」
「ミシェル・エリオット・・」
「何処に住んでるんだ」
「・・・ユニオンスクエアの三番街」
セブンが割ってはいる。
「三番街だー。理性の街の高級住宅街じゃん。ボンボンが本能の街

で迷子かな」
俯く少女の顔を覗きこみ吐くセリフは、まるで二流映画の悪党。ミシェルには悪いが笑わせてくれる。が、それも封筒に入っていた何枚かの写真を見て凍りつく・・スネーク・・蛇の抜け殻が写る紙切れに怒りと共に心を奪われそうな気がした。セブンは呆気にとられた姿を見て写真を除きこんだ。グロテスクな物体と化した仲間・・リビングに走って行き・・嘔吐。ピンポーン・・ピンポーン・・呼び出し音・・リビングにあったインターホンを無意識に取ってしまう銀髪。
「誰！！」
「ルームサービスだぜサーティーン」
「俺はセブンだ。七つの頭脳を持つお・・」
玄関から銃弾・・「ＦＵＣＫ」身を屈め元の部屋へ滑り込む。俺は銃を抜きミシェルの手錠を打ち抜いた。「キャッ」と声を震わすが、すぐに傍に来るように合図した。玄関の男に応戦しているセブン。弾切れ・・「クソが、こんなサービスじゃすぐ会社潰れちまうぞ」と叫び、投げる銃身。
「終わりだな・・昔てめーに砕かれた顎がよ、この頃疼くんだよ・・へへ」
男は何を勘違いしてるのかゆっくり部屋に近づいてくる・・息を潜め構える・・ズカズカとせまる影・・「迂闊な野朗だ・・」飛び出しダンダンダン・・ダンダン・・
男はとっさに急所を守り腕でガードした。９ｍｍの穴が五発開き、落ちた銃をセブンが拾いもがく男に見下す様に銃を構える。
「あばよ腐れボーイ」
カシャッ・・・
「くそ・・またかよ・・」
やっと思い出した。
「・・・殺し屋のルームサービスならやる事は一つだよな・・グリルに雇われたんだろダニエル」

傷口を踏みつける・・悲鳴。微かに動く手で顎を撫でる。
「俺の恨みはピーターパンを憎むフック船長より深いんだ」
セブンと目が合い笑った・・「決まらねーな」そして、脱出経路を頭の中でシミュレーションした。これは罠だ、恐らくこの建物にはあのジャンキーみたいな連中が狙ってくる。ミシェルのいる部屋に戻り、窓を覗いた。逃げ道はない・・隣のビルの屋上にアサルトライフルで狙うハットを被った奴が獲物を捕らえていた。その口元は釣り針で引かれたように引きつっていた・・むしろ微笑んでいるのだろう。口元が戻り何か行った様だ・・ガバメントを発射しながら怯えるミシェルの手を引きリビング走った。
「ダニエル・・殺られちまったのか。ママには勇敢だったと伝えておくぜ・・」
炸裂音も無く窓から降りつける５．５６ｍｍのアイスピックでさした様な後が迫る。
リビングにいたセブンの足もかすめる「ぐあぁ」・・ダニエルに被弾・・「ローートーーー」少なくともまた三発は穴が増えた様に見えた・・玄関まで走りぬけ、廊下にでた。
「やっぱだだじゃ返さないよな・・ミシェル下がってな」
エレベーター前にいた黒フード共がゾンビの様にゆっくりと近づいてくる。「シィィィ」口元から漏れる呼吸音。あきらかに尋常な奴らじゃない・・ドサッ・・玄関からセブンが足を引きずり倒れこむ。
「クソ、誰だかしらねーが仲間もろとも撃つなんてロクな奴じゃねー・・なんだ・・・さっきの連中じゃねーか・・」
「セブン・・あいつら何かおかしくないか・・」
「きったねー奴らだな。ヨダレ垂れ流しじゃん・・も、もしかして・・こいつらが・デットクリィーチャーズ・・」
「なんだそれ・・」
「前にオルガニズムの兵隊の一部は特殊なドラックで覚醒された死兵になるって報告があった。見るのは初めてだけどな・・」
「覚醒された死兵、俺には棺桶に片足突っ込んだジャンキーにしか

見えないけどな」
部屋から叫び声が聞こえた「サーティーン・・これで終わりじゃないぜ」ダニエルは今にも死にそうな傷を負いながら「へへへ」と笑い、注射器を取り出し自分の首に注す。セブンは言った。
「なんであいつ笑ってんだ。何発も撃たれて死にそうだったのによ・・」
「マゾなんだろ。それより」セブンにガバメントとマガジンを投げ渡した。「ミシェルを頼む」
「はっ。マジかよ・・いいけど、あいつらにナイフ一本て無謀じゃね」
「俺が誰だか忘れたのか」
「ブルーイナフの１３番目だろ・・」
「見せてやるよ・・俺がなんでブルーイナフの悪魔て呼ばれたか。」
「き・・清春・・」
セブンの驚く面をバックにデットクリーチャーズだか腐れジャンキーだかに向かった。セブンは壁の窪みに震えるミシェルを押し込み、辺りを見回しながら胸元から安く光るバタフライナイフを舞わし片手でガバメントを構えた・・・それを俺は肌で感じる・・ヒシヒシと刺す殺気、ミシェルの悲鳴にも似た微かな振動、セブンの恐れを隠した呼吸音・・どれも感じるといったレベルで把握できる。この感覚を開放するのは最後にファーストと戦っていらい・・約七年ぶりのサーティーン。まるで世界はスローモーションで動く灰色の深海。孤独と執念の結晶＝最自由＝暴君・・サーティーンはボソッと呟いた。
「Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｇｒｅｅｄ　Ｉｓｌａｎｄ・・」
怒り・憎しみ・恐怖が生むサーティーンの世界。俺はこいつに飲みこまれて行くのに抵抗は無かった・・スネークに捧ぐ鎮魂歌の如く、だが音も無く変わる世界・・始めに聞いた音は〝グシャリ〟という死兵の顔が潰れる音だった・・
黒い影はゆっくりと近づき間合いの手前で動きを急変させた。恐ろ

しく早いスピアー、しかし、灰色の深海ではスローに・・サーティーンは片手でグシャリと顔面から幾何学模様の床に叩きつけ、後ろの男にブロンクスナイフを投げる・・ザク、、胸に命中・・膝から崩れ落ちる男の背景に銃を握る男が二人構えていた。崩れる男の首を掴み盾に・・バンパイアが死の恐怖を払うかの様に吠える奇音の様な声を発し、口を大きく開き威嚇・・ナイフを引き抜き喉に突き刺し前進。二人の男の前に着く・・発砲・・同時にビクン、ビクンと動く盾・・ブロンクスナイフを逆手に持ち、銃を持つ手を一線・・こぼれ落ちる銃と手首・・喉ごと刺し壁に張り付け最後の一人へ・・盾を離し、四角から踏み込みボディーブロウ・・ダン、、空を切る弾丸、アバラがボキボキ音を出して折れる。痛みを感じないのか空いている手で殴りかかってきた・・避してもう片方をいただく、ボキボキ・・それでも倒れ際にトリガーを・・引く前に顔面へ拳打＝陥没。転がる二丁の銃を拾い構えながら前進。脱出経路の確保・・サーティーンの顔は純粋に戦闘を楽しんでいた・・

後ろでは何処から湧いたセブンが死兵二人に応戦している。死兵はガバメントの弾をかわし、くらいながら進んでくる。ナイフを持つ奴と斧を持つ奴。後者は弾丸を浴びすぎ、這い蹲りながら向かってきている。撃鉄をカチカチと鳴らし、マガジンも使い尽くガバメントを投げ大声で

「Ｉｔ、ｓ　ａ　ｄａｎｃｅ　ｌｉｋｅ　ａ　ｂｕｔｔｅｆｌｙ、、、Ｉ　ｓｔａｂ　ｙｏｕ　ｌｉｋｅ　ａ　ｂｅｅ、、、」

と、死兵を指差しボクサーみたいなステップを踏み出した。英語でキメるのはもちろん、さっきのサーティーンの真似。足を引きずる、ぎこちない動きをミシェルは不安そうに見つめている。が、以外にも私兵の腹をバタフライが切り裂いた。「ＹＥＳ」セブンはミシェルに見せる様にポーズをキメる。しかし、ミシェルの目は怯えるばかりその後ろを見ていた。それに感づき後ろを向き横なぎに払われ

るナイフを皮一枚でかわした。「クソ・・なんで動けんだよ」臓器の漏れた男はセブンに覆い被さりナイフを突き刺そうと両手を上げている。

来た時はエレベーター前に８人の黒フードの男がいた。少なくてもあと４人・・セブンの悲鳴にも似た叫び声が聞こえる。エレベーター前には二人、視覚での確認でなく波立つ様な殺気を感じる。手前の非常階段からも迫ってきているのを感じる＝サーティーンの能力〔ソナー〕壁に背をつけ飛び出し左右の銃で二人の額を撃ち貫き、利き手の右銃を円を描くようにターンさせ、セブンに覆いかぶさる死兵の額を穿つ。左銃は非常階段に向けられ向かってくる死兵の脳を的確に破壊。

ナイフが頬を掠め鏡の様に目と目が合う。ドサッと覆い被さる死兵を邪魔そうに蹴飛ばした。「ワーォ。スリーポイント、コービー・ブライアントも真っ青なシュートだぜサーティーン」床に刺さったナイフを抜き、はえずる斧男をめった刺しにし、返り血の付いた顔でミシェルにニヤリと笑って見せた。ミシェルは息を飲みこみ清春の元に走った「クソガキィ。俺を置いてくなよー。」セブンはおどける様にからかう。５１３号室の玄関が空いた「へへへ」と微かに笑う声と共に半死の身体を引きずりダニエルは走り去る少女を目で追った。今度はマジで驚いた・・

「こいつらといい簡単にはくたばらねーな」

バタフライナイフが脇腹に刺さり、ダニエルはクルっと首を向けた。

「今の最高だぜ兄ちゃん、もっとしてくれよ」

「気持ち悪りぃーな・・マゾ野朗・・」

ナイフでえぐる・・

「そうだ・・イッちまいそうだ・・へへ・・そんな変態をみる様な面すんなよ。Ｆｅｅｌ　Ｔｉｍｅって言ってなデットクリーチャーのドラックとは全くの別物・・こいつはまさに至福の時だぜ」

言い終わると同時にダニエルは腕を丸太の様に振り回す。セブンはナイフを離す・・なぎ払った腕が柱を粉砕した。
「こいつはやべーな・・」
足を引きずりながらエレベーターの方に走った。「へへへ・・もっと遊んでけよ・・へへへ」追いかけるつもりが床に転がり、立ち上がらずに上半身を起こし天井を見上げている「へへ・・気持ちいいぜ・・」

非常階段からはぞろぞろと死兵が上がってくる。それに応戦しているとミシェルがエレ
ベーターに駆け寄りスイッチを何度も押した。銃を撃ちつくし一段落ついたかの様に死兵は現れなかった。ドクン・・また殺意の波が押し寄せる。ダニエル・・それにエレベーター・・「キャー・・」悲鳴が聞こえる方に走ると四人、ミシェルを襲おうとしていた。死兵達はサーティーンの存在に気付くと、フォーマンセルの陣形をとり持っているナイフを同時に投げつける。四本の刃が向かってくる・・その空気の摩擦をも感じ取る灰色の深海での唯一のソナー。まるで、揺れる柳の様に一本・・二本・・かわす。飛んでくる残りの二本を・・キャッチ&回転。二人の心臓にナイフが突き刺さり力なく崩れる。床に顔面を付けるまで、リングに例えるならキャンバスにキスをするまで、何故倒れているのか理解できないって顔でダウンして行く様。後ろの二人もそうらしい、一瞬でフォーマンセルが崩れたのを理解するのに時間が掛かった。が、理解した時はもうサーティーンの間合いの中、テンプルへの一撃・・死兵の首がゴキっと曲がりそのまま一回転して床に激突。最後の死兵は自ら距離をつめ左右のフックのコンビネーションが頭部を狙う。それをスウェーでかわしながらクロスカウンターで合わせ顎にヒット。ゴキっと言う鈍い音はしたが死兵は止らずにボクサーさながらの左フック・・ダッキングでかわすが、フックが伏線の様に鋭い右ボディーがサーティーンにヒット。唾を吐きながらギラっと目を輝かせるサーティー

ン。再度、左フックを見舞う死兵・・だが当たったと思った瞬間スゥっとターゲットは消えた。そして、下の方うから「今のは聞いたぜチンピラ野朗が・・」サンドバックの様に死兵が浴びる乱打、吹き抜けの強化ガラスを背に何度もボディー、ストレート、アッパー・・ガラスにひびが入りミシェルが呟く「もう止めて・・」サーティーンは最後の一撃を溜めて放った。同時にミシェルは叫ぶ「もうやめてー！」ガシャンとガラスは割れ死兵は「あぁぁぁ」と呻き声を上げながら落ちていった。ミシェルは純粋に悪魔のゲームを楽しむ男の目を恐れるでもなく、見つめている・・灰色の深海でその目は力強く、また美しく輝いていた。その瞳の中に吸い込まれそうになる感覚。

「・・・クソ、調子狂うぜ・・」

鈍重に流れる世界が速度を増す・・サーティーンの世界はブラウンの瞳の中に吸い込まれて行く・・少女はただ見つめている。

「はいはい分かったよ。で、ここから無事に帰るつもりがあるなら俺から離れんなよ・・」

皮肉交じりだが、悪い感じはしなかった。もう何年の前・・俺を制御不能のブルーイナフの悪魔から救ってくれた人。少女は俺に理性を与えてくれた人と同じ目をしていた・・

「女神との約束・・か」

ミシェルはエレベーターの中に走りはしゃぐ様に言った。

「早くしないと行っちゃうよ」

「この状況で笑えるなんてたいしたガキだな」

見透かした様にまた笑う。

「だっておじさんが守ってくれるんでしょ」

死兵に刺さってるナイフを引き抜き向かった。

「おじ・・ぷるぷる震えてる方がよっぽ可愛げがあったな」と、１Ｆのボタンを押しシャッターを閉めようとした。

「で、おじさんじゃなくてお兄さんな」

・・・・

「あっ・・・」
ミシェルとハモった・・顔を見合しセブンを忘れてたことを確認しあった。ガシャっとシャッターに細い指が掛かる。とっさにナイフを構えるが「俺を置いてく気か」セブンは銃で死兵を撃ちながら転がりこんできた。エレベーターが動きだし、銀髪は乱れる息と髪を整えながら目で訴えている。俺は言った。
「お客様・・何階にいたしますか・・」
ミシェルは両手で口元を隠しながら笑った。大きく息を飲みそれを吐く。
「一階だバカ野朗！」
普通に返したこいつに笑いそうになった。４・３階と下り、各階のオープンスペースには予想に反し死兵は居なかった。セブンは小刻みに呼吸を繰り返し落ち着いたらしく寝ながらミシェルを指差し告げた。
「・・何笑ってんだよクソガキ。俺を置いてきやがって・・てめー、ろくな女にならねーぞ」
「うけるぜ。お前からそんな言葉が聞けるなんてな」
「うるえー。清春てめーもだろ・・まじてめーらには失望したぜ・・くそ」
ピンポーン・・機械音と共にエレベーターは止った・・２Ｆ。オープンスペースにはアサルトライフルを構える男が一人。
「ひゃっはー。サーティーン、ドゥユーリメンバーミー」
「ロト・・やっぱお前も着てたのか。」
反射的にミシェルを死角に突き飛ばし身を潜める。乱射される弾丸。
「お前も俺を失望させる気か」セブンは銃を放ちながら言った。ハイテンションに飛び交う弾丸。セブンのまぐれ当たり。
「ぐは」エレベーターは下がっていく。「銀髪野朗がやってくれるぜ・・」ダニエルと同じＦｅｅｌＴｉｍｅを首から注入、瞳孔が開き「ひゃははは－」と笑う様が最後に写った。ミシェルはイカれた人間を見るのに馴れたのかあまり気にしていなかった。むしろ怯え

るよりもエレベーターを操作して下げたことを褒めてもらえるかの様な表情でリアクションを待っている。俺は片目の動作でそれに答える。セブンの方へと目を向けた・・こいつも何か待ってる様子「は、お前も・・」言葉にはしなかった。無視して一階に居るかも知れない敵に備えた。
ゆっくりとシャッターを開き、ロビーは最初にセブンがのした男が横たわっているだけだった。セブンはそいつのポケットをまさぐり青い錠剤の様な物を取り出した。
「こいつがデットクリィチャーズの正体か・・」
「あぁ、帰ったらお前の雇った傭兵に飲ませてみな」
セブンは苦笑いを浮かべ車へ向かった。非常階段から漏れるロトの声ともう一つのエレベーターが一階に向かうと同時に大きくなるダニエルの声。不気味な笑い声を上げながら二人はここで鉢合わせた。ミシェルが俺のシャツの袖を握る・・いくらなんでのアサルトライフルにフィッシャーレイズ兄弟じゃ分が悪い・・ナイフをロトの利き手に投げ刺す。グサリとささりライフルを持つ手が力なく下がる。
「ミシェル今だ・・」同時に車へ走りだす・・が、追ってくる様子も無く、刺さったナイフを気にするでもなく兄弟は話し始めた。俺は振り返り立ち止まった・・「清春ぅ何やってんだよ。今度は俺が置いてくぜー」セブンは車から叫んだ。
「へへ・・兄貴もＦｅｅｌＴｉｍｅを使ったのか・・へへ・・タンの野朗、試作品だなんてぬかすから大したことねーと思ってたがよ・・このピルは最高だな」
ダニエルはアバズレが指を突っ込む様に、穴の開いた傷口をかき回している。ロトは至福の時が効きすぎたのか快楽で唾液を垂れ流し、既でろれつが回らなく何を言ってるのか分からなかった。
「なぁ兄貴・・そいつで俺を撃ってくれよ」
ロトは身体をビクつかせながら喜び、横一線に放った。
ダニエルのでかい図体が吹っ飛び仰向けに・・血を吹きながら笑う。
「最高だよ・・マジで・・へへ、ここなんてあと数センチ上だった

ら致命傷だった。さすが、兄貴だぜ・・へへ・・もっとだ・・もっとくれ」
すでに十発は開いた穴の一つを指し、また血を吹く・・「撃て！ぶっ殺せ！」ロトはその弟を見下しライフルをむけ発射した。カチッ・・・「ガッッッデーム」本当に悔しそうな力の篭った声が響く。ロトは子供みたく首をかしげている。ダニエルは微かに変わってきた感覚に気付いた。それは・・痛み。胸元から新しい注射器を出す、が弾丸にやられ粉々になっていた。
「兄貴・・ＦｅｅｌＴｉｍｅを分けてくれ・・もう・・効果が切れそうなんだ・・へへ・・」
首を逆にかしげる。唾がダニエルの顔をにかかりキレる。
「ロト。早くしてくれ。だんだん・・」
フリスビーを投げてくれと哀願するドーベルマンの様にロトは見つめている。
「分かったよ・・そいつで俺の頭を潰してくれ・・へへ・・早く殺れ、なぁ兄貴」
ダニエルは観念したように笑った。ロトは銃口を握りハンマーで杭を打つ様にダニエルの顔面を何度も何度も打ちつけた。打つ度「へへへ」と笑っていたが、最後はビクンと身体を痙攣させていた。
「とんだブラザーシップだな・・」
俺は車に駆け寄った。「遅いぜ清春ぅ何やってたんだよー。」
セブンはアクセルを吹かし、ミシェルは心配そうな顔をしている・・
「いや、なんでもない・・いったんスネークの・・アジトに帰ろう。これからどうするかはその後だ・・」
少し疲れた様に言うと、社内は静まりかえった。セブンはセブンの、ミシェルはミシェルの、そして俺は俺の考えをまとめる時間が必要だった・・・がセブンが一言。
「悪魔のパーティーの後は秘密基地までドライブだぜお嬢ちゃん」
ミシェルは眉間に溝を作り何か言いたげ俺を見上げた・・
「空気読めって・・俺に言うなよ・・」

ＰＭ７：１３　Ｍｏｎｄａｙ

地獄があるのなら・・転がり落ちて行く先を考えるよりも打開策を行動に移すべきだ。もしも、頭が真っ白でボディを抉られた様な吐き気を与えられたとしても、身体に染み付いたパンチを出し続けるファイターの様に戦い続けなければならない。マリオネットの糸が切れるまでは・・・

セブンはこれから迎える状況を恐れる様に喋り続けている。予め計画がされた罠・・短時間で消えたスネークの死体、二人組みの殺し屋、グリルの言葉、俺ら行動を逐一監視し、情報を洩らしている奴がいる。ミシェルはセリフのない役者、ナインポインツの町並みを黙って眺めていた。ブラックマンバのアジトと呼ばれるビル・・車が止り中に入って行く。１Ｆロビー・・隠していた嘘がばれた様にセブンの顔色が一瞬で青ざめた。ビジネスマン、警備員＝傭兵、・・皆殺しにされている。セブンは人生の終わりでも告げる様に言う。

「・・なぁ・・てめーは神ってのを信じるか。この光景を見てＹＥＳと答えるられるのは悪魔だけだよな・・」

「神だと・・そんなもん信じたら足元をすくわれる」

笑えないって顔で力なく銃を構える。死体には三本爪で引き裂かれえた後、獣に喰いちぎられた様に抉られた傷跡が残っていた。傭兵を含めて２０人弱・・銃で撃たれた形跡も無く倒れている。

「ガキは置いて行くかホラーハウスとは訳が違うぜ・・」

ミシェルはうつむいたまま、俺のデニムを掴み首を振っていた。

「悪魔のゲームが終わってないなら、安全なのは俺といること・・だろ」

「てめーはやっぱロリコンでフェミニストだ・・」

受付をチラっと見て構えた銃をだらりと下げた。セブンが別れを惜しんでいた女は首を折られ椅子の背もたれに寄り掛かりながら目を大きく開きながらこっちを見ていた。セブンは急にエレベーターに

走り出しボタンを押して回る・・
「くそ、ぶっ殺してやる・・」
２Ｆ～９Ｆまでのエレベーターと非常階段はロックされているようだ・・
「１０Ｆの直通以外ロックしてやがる・・」
１０Ｆへの扉が開く・・男が二人、酒をあおっている。セブンはぶち切れ叫ぶ。
「ヘルビースト！てめーら裏切りやがったのか。」
ズカズカと足音をさせながら男の目の前に銃を向けた。男はおどける様子も無く、酒を一気にあおりボトルを床にほおった。
「お前は・・サーティーンか・・」
ギロリと鋭い目で睨みゆっくりと立ち上がった。
「シカトかコラ。舐めやがって・・」
セブンは男の顔面を弾いた・・が、同時に中を舞う銀髪・・床に倒れ動かなかった・・
「雑魚は退いてろ・・」
男はまたゆっくりと・・確実に近づく威圧感と共に近づき俺を見下ろした。灰色で獅子の鬣を彷彿させるヘアースタイル、険しい顔付きでは百獣の王の威厳を醸し出している・・俺は男の目の奥を睨みながら言った。
「お前がスネークを売ったのか」
硬直・・もう一人の男が音も無くスゥっと立ち上がる。黒尽くめの男はゴーストの様に近づき瞼から唇に掛かる幾つものチェーンを三本指でかきあげ、指の隙間から少女を見て怯える姿を見つめながら話し出した。ミシェルは俺の後ろに隠れた・・
「始めましてサーティーン、元といった方が的確なのかな。こんな所で会えるなんて光栄です。私はカラス・・彼はグローディアです。私たちはブラックマンバとの同盟を破ったつもりはありません。先程、何者かの手によってスネークの死体が我々の元に届いた、蛇の頭が潰れた、とういことは力のバランスが崩れ、共闘の意味が無く

なった・・」
死神が纏わり付く様な気配とは裏腹に三本指からは涼しげな瞳を浮かべている。
「なら、お前らもグリルのゲームにのった口かい・・」
かすれた声でグローディアは言った。
「何・・グリルに会ったのか・・」
カラスは隠れるミシェルを覗きながら「言わば、私たちは弱ったハブに食いついたマングースなんだよ・・」
セブンはよろけながら立ち上がり七つのパソコンまで行き録音していたらしく、グリルとスネークの会話を再生した。
・
・
・
スネークの死に際の叫びにグローディアは静かに呟いた。
「見事だ・・」
セブンは理解できないって顔で銃を再度向けた。まるで気にする様子も無く獣が遠吠えをあげる様に告げた。
「蛇頭に免じて今日はこれで引き上げてやる。だが、奴の死はナインポインツの均衡を崩した・・ブルーイナフ解散後以来の戦争が起こるだろう。ヘルビーストはこれより戦闘体制に入る・・次に会う時は地獄の獣が牙を剥く・・」
カラスはいつの間にか三本指に鋭利な刃物を装着し切りかかってきた・・ステップバックでかわしたが薄皮一枚切り裂く。
「くくく・・グローディア、それは頭の潰れた蛇に私達と争える力があればの話ですよ・・まぁ、うちの獣どもは血に飢えててね・・餌を与えないとこちらが噛み付かれてしまう」
三本指の表情は終止涼しげだった。ヘルビーストの二人はエレベーターに足を運び「てめーらこんなこと遣らかして生きて帰れると思うなよ」セブンは震える手でグローディアを狙う・・四発、弾は反れ壁に穴が開く「・・・バカな・・俺はちゃんと狙ったのに・・」

そして、消えていった・・
虚ろな目でセブンは呟く・・「ブラックマンバはお終いだ・・くそ・・」キメていたオールバックを掻き毟り落ち着いたと思うとパソコンで各フロアのロックを解いていった。生き残っていた2～9階の社員たちは一斉に外に飛び出し逃げていき、モニターでそれを見るセブンは何も言わずにエレベーターで降りて行った。
俺とミシェルは長いことセブンの帰りを待っていたが、彼は帰って来なかった。また、コロッと態度を変えてくるはずそう思っていたのに・・1Fに降りた俺たちは死体を避けながらセブンを探し外にでた。時計の針はもう1時をまわっていた。スネークのアジトとは真新しいゴーストタウンみたいに静まりかえっているが、遠くで大きな爆発音や叫び声が聞こえる。ブラックマンバ・・スネークの支配を無くした無法地帯・・非難・立てこもり・暴徒。俺は車を荒らす輩を排除しながらミシェルを助手席に乗せアクセルを踏んだ・・携帯でセブンへのコールを鳴らしながら・・

Who・・is・・this・・記憶・・

コンクリートの檻・・
檻と言っても牢獄には近いが他者から隔離された空間ではない
犯罪歴ゼロ・・自ら作り上げた厳重なロック＝規律
身内ですら踏み込めぬテリトリー＝罠
突然、牙を剥く家畜化されたライオン＝弱者
相手にする者はいない・・・孤独を打ち消す打開策＝モンスターを生み出した
妊婦の様に腹は出ないが歪んだ心が生んだ〔何よりも高密度の何か〕
化け物が生まれた時の感覚＝科学者には理解不能な単位
マスメディアの餌＝架空現実の網でもがく雑魚

彼は怯える猫を見て言った「俺を百獣の王だと認めている」
虚無の王。現実にぶつかる度、彼の中でヘドロが流れる様にゆっくりと確実に成長して行く非現実
ある日、爆発的は成長を遂げる・・現実と対面
一通の通知書。掛けられた保険金＝犯行未遂
加速するネガティブな妄想・・血の滴る包丁・・高密度の膨張
衝動的にとった行動の後始末。刻まれた死体＝首、手足、胴体。返り血は血縁
取り出した１６番アイアン・・首にフルスイング・・・感傷的なものかは不明
紙くずを捨てる様にバスタブに放り込まれた肉片
鼻歌を歌いながら返り血をシャワーで流し目を瞑る
そこに居たのは〔何よりも高密度の何か〕の正体
モンスター、ゴースト、サイコパス・・まだいる・・・＝対話・・・
虚無の王から虚無が消える瞬間
「すがすがしい気分だ・・まるで成長を飛び越えた進化・・生まれ変わったと言ってもいい・・なぁ、そうだろ・・俺には新しい名が必要だろ・・お前達の王・・俺の名は・・セブン」

第二章　ユニオンスクエア　一幕　迷走　Ｒａｓｏｎ&Ｉｎｓｔｉｃｔ

物静かな酒場、マスターの微かに動く手馴れた動作と１４インチＴＶから流れる声がいやおうにも鼓膜を刺激する。ユニオンスクエアのニュースキャスターは昨夜、ナインポインツの一角が事実上崩れ去った事を手短に伝えたあと本題へ入った。ユニオンスクエア三番街のお嬢様が誘拐された・・と言うが写真にはミシェルの顔が写っている。「まさかな」俺は呟きウォッカの入るグラスを口元に運んだ。ビンゴ・・犯人とされる顔写真、グリルの素顔・・ではなく良く鏡で見る面。グラスを拭くマスターの手が一瞬止まり、流れる。幸い店内には昼真っから飲んだくれてる用心棒と誘拐された少女。ミシェルは嫌悪感たっぷりな表情でニュースキャスターを見ていたが、目線を覗く様に誘拐犯に向けた。バン・・とグラスを置き尋ねた。

「一昨日は騒がせてすまなかったな」

マスターは思い出す様に眉をひそめた。

「あの時の・・いえいえ、ボトルも売れたことですし・・しかし、まさかこんなことになるなんて・・」

「こんなこと？誘拐犯が目の前にいることか？」

首を振り「誘拐された子がこんなになつきますか。あの時の彼がブラックマンバのリーダーだったんですよね」

俺はミシェルの耳元に顔を近づけ車で待つように言いマスターへの本題へ入った。

「スネークの死は急すぎた・・俺も驚いてる。あの用心深い蛇が簡単に捕まっちまうなんてな」

「長年、グラスを磨いていると表情が見えてくるんですよ。磨けば光る物も所詮はガラス細工。大事にしていてもある日、簡単に壊れてしまう」

蛇の真似事＝カマがけ「聞いた話じゃ誰かが情報を洩らしたらしい」

「誰か？まさか、私はここで酒を売ってるだけですよ」
蛇の真似事＝カマがけ＆威圧「俺がわざわざ誘拐されたってガキを連れてユニオンスクエアまでドライブしてると思ってんのか」
「ナインポインツの警官はあてになりませんから」
銃を抜いてカウンターに置く「テメ～が売ったのは酒だけじゃない、魂も売ったんだろ・・グリルにな、調べさせてもらったぜ」もちろんプラフ、感じる確信「動くな」銃を素早く握り１８０度ターンさせ用心棒にＨＩＴ「動くなって・・お前に言ったんだけどな、聞こえなかったか」早業、ウィザードの真似事＝ガンさばき。マスターはカウンターに忍ばせていたショットガンに手を置いたまま口に銃を咥えている。「答えろ・・質問から拷問に変わる前にな・・マスターって生き物はショットガンが好きなのか？」マスター＝黙秘。
炸裂音・・頬を貫く弾・・無表情に口を開く。
「ここは彼の監視下にあります。これ以上の質問は私にとって死を意味する」
「吐いても吐かなくてもどの道死ぬんだ、俺ならグリルより楽に殺してやるぜ」
「あなたも逃げた方がいい・・」カウンターごしに唸るショットガン・・マスターの胴が真っ二つに・・銃にぶら下がる上半身＝喉を詰まらせた声とは逆に無表情に「この通り・・私は痛みを感じない。フィールタイムの副作用です。心も死んでしまったようで何も感じない」虚無の共有＝視線のクロッシング＝沈黙「いいでしょう。ブルーイナフの１３番目、グリルを追うならまずは直接命令を受けるタンを見つけなければなりません。グリルの手掛りは彼だけです。そして、タンも滅多に姿を現さない」
「ネオブラットトーナメントまでは・・か」
「あの日、タンはブラックマンバのリーダーをさらいました」
銃にぶら下がるマスターを床に放り見下ろし構える「それがグリルの書いたゲームのシナリオか？」
首を振るマスター「私はただ何も感じない人生を終わらせようとし

ているだけです。音に聞いたサーティーンなら話してもいい、私の理性がそう言ったんです、数式の答えを出す様にね」
「自殺志願者かよ、つまらねー・・死にたかったら勝手に死にな」ショットガンを放り投げる。受け取る上半身＝無表情に息を漏らす。
「割りに合いませんが、私はあなたにレイズした状態でドロップアウトします。最後まで中途半端な・・・」
「何言ってんだ、俺に賭けるって、俺を知りもしないでよく言うぜ。てめ～はギャンブルには向いてない様だ」
「私はブルーイナフの住人でした。ナインポインツに変わる争いを間逃れる為にユニオンスクエアに移ったんです。しかし、所詮は学もなく本能の街出身の私は理性の町では生きて行けなかった。そこを私はに悪魔に救われた」
「だから、スネークのことは許してくれって、それは虫のいい話だな。俺はスネークの死に関わる奴らを許さない。あいつは俺をこの世界に引き戻してくれた仲間だ、グリルを棺桶に送ってやらないと気がすまね～」
「レイズ。私の感情が死んでなかったらポーカーフェイスではいられませんね・・リベンジャーですか、ブルーイナフの悪魔と呼ばれたあなたらしい、本能のおもむくままに・・どうか・・息子を殺してやってください」おもむろにショットガンの銃口を首筋にあて、作られた笑顔で引き金を引いた。俺は銃声よりも最後の言葉に驚いた。グリルの親・・死を望まれた子。拳銃をだらりとさげ車に向かった。
一昨日の晩、三人で話していた駐車場。ミシェルが走り寄ってくる。銃声に驚いてきたのだろと、肩竦めトリガーを指に掛ける、くるっと銃は反転＝敵意なし・・・無防備に開いたボディーに助走の付いたストレートが決まる「え、はぐぅ・・」膝が地に着き蹲る・・溜め込んだ一撃&リリック。
「また人を撃ったの！あやしい人にはバンバンバンバン、痛いとか可哀想とか思はないの？」

「なんだ・・いきなり喋りだしやがって・・」顔を膨らます少女を見上げ&クルっと銃を向ける「ガキとレディーに銃を向けるのは主義じゃないが、じゃじゃ馬ならしはシェイクスピア流でいくぜ」
ハイハイといった感じで虫を払う様に流す「早く家に返してね、誘拐犯のおじさん」
「おじ・・だんまり決め込んで指しゃぶってる方がよっぽど可愛げがあったな」
ミシェルは大袈裟な瞬き一つで返事をし助手席へ向かった。
「あのガキ図に乗り出したな、ここに捨ててっても荷物が減るだけなんだぜ・・」
窓から首をだしニコッと「・・何か言った・・」屈託のない笑顔。・・・セブンの言った通りだ、ロクな女にならね～・・「また、悪口いったでしょ」
「はいはい分かりましたよお姫様・・」
世間知らずと言うか住む世界が違うのか・・だけど、この感じ、俺がリベンジャーだってことを一瞬でも忘れさせ悪い気はしなかった・・あの日の彼女の様に・・・

#

聳え立つ白い壁が果てしく続く理性の街の外壁＝シェルター。審判の門と呼ばれる出入り口。ユニオンスクエアに入ったのは少し暗くなる頃だった。
通信＝軍本部～軍研究所・所長室［誘拐された少女と犯人、元ブルーイナフの１３番目を監視カメラが捕らえた。人質及び不穏分子の排除にあたれ。これは警戒レベル４だ。お前らの価値を実績で表せ］
［ラジャー］放送［第１２７特別小隊に告ぐ、直ちに所長室まで来い。繰り返す・・・］
宿舎ラウンジ・・スティービー・ロックマン「俺らキメラ部隊が呼ばれるってことは」

宿舎ラウンジ・・ブラットジョー・リプレント「警戒レベル４、面白くなってきたな・・」
３階所長室前・廊下。モーリス・ブレイキー、外壁をよじ歩き窓から「やっぱ俺が一番だよな」
一番乗りエレガノ・リルム「遅いんじゃなくて蜘蛛男さん」
モーリスの失笑「予知能力には勝てないか」・・雑談
三番手は群れを嫌う狼ミルド・マクドナルド・・沈黙
エレガノの一言「ミルド、いつも思うんだけど、もっと協調性をだそうよ」・・沈黙
モーリスのフォロー「無口なだけだって、頼りになる男だぜ」モーリス＆エレガノ＝雑談
「やぁ諸君、全員あつまってくれたね」通称、ハイエナのグラン。
エレガノ「隊長。まだ、あの二人が来ていませんが・・」ミルドは奥の階段を指差す。振り向き「・・あっ！あなた達・・いるの？」
目の前で人型に歪む空気「きゃ！」
姿を現す＝爆笑
スティービー「相変わらずからかいがいのあるリアクションだな。予知眼に俺らの姿は映らないか」
ブラッドジョー「俺は止めたんだぜ。だけど、こいつが聴かないんだ」
怒り心頭のエレガノ「あなた達に見えるのは戦場での死よ」
スティービー＆ブラッドジョー「ＧＯＯＤ」
「イタヅラに能力を使うな・・俺らはＤＮＡ移植に適応できなかった兵士達の骸の上を歩んでることを忘れるな」グラン
スティービー＆ブラッドジョー＆エレガノ「アイムソーリー・サー」＝敬礼
ノック・・一変、無表情な軍人＆戦闘サンプルのサーフィス。許可と共に所長室に入る六人、意思を持たない犬の目。深々と座るルドルフ・ルッチー大佐＝所長。
グラン「第１２７特別小隊６名揃いました」

「ご苦労・・早速だが本題に入る、イーストゲートから指名手配を受けた男が侵入したのを監視カメラが捕えた。侵入から凡そ２３分。現在、軍本部司令室で監視中、君らは直接本部の指示に従え。正面玄関に輸送車を用意してある・・お前らの価値を実績で示せ」
グラン「ラジャー」＝キメラ部隊の敬礼。機敏な態度で所長室を出る＝ダッシュ、窓から飛び着地する六人。
脳に直接送り込まれる情報＝通信機。通信＝本部通信兵
［今回、くそったれキメラの指示をするミラ・スタインだ］罵り口調の名物女。
グラン［獲物は？］輸送車に走りながら罵りにも眉一つ動かさない
ミラ［場所は輸送隊員に指示してある。詳しい位置は現場に着き次第貴様らにも指示する］
「オーケー、女王様何なりとご命令を」否通信・・スティービー＆ブラッドジョー＝談笑
ミラ［ターゲットは一名、元ブルーイナフの１３番目だ、写真の情報を送る。一度はぶち込んでもらいたいぐらいのいい男だよ］
モーリス＆エレガノ「あのサーティーンか・・レベル４の訳だ」「本能の街の奴でしょ、例えるならボクシング世界チャンピオンＶＳ実験サンプル集団ってとこかしら」「俺達既に人じゃないんだな」
「壁を歩くのにそんな疑問を持つのね」ミルドがご自慢の牙を見せるように口元を緩ます。ジープの後ろに乗り込む六人。脳裏に浮かぶ情報・・清春＆ミシェル。
グラン［・・この少女は保護するのか？］
ミラ［人質救出は絶対条件だ・・およそ、１５分でターゲットに追いつく捕獲及び排除方法はグランに任せる、この間に装備の確認でもしているんだな］通信一時停止
スティービー「口の悪い女は嫌いじゃない」
ブラットジョー「強気の女も入れちまえば案外可愛いもんだ」拳＆拳のキス
エレガノ「ホントあんた達って最低ね・・」

「それはどうも、ところで予知眼では今回の結果は見えないのか」
「見たい時に見れたら苦労しないわよ」
「大したことね～な、俺らみたいにＤＮＡを組み込んでもらった方が役に立つんじゃないか」
モーリス「エレガノの能力は貴重なんだ、俺達みたいに替えが聞かないし狙撃の腕も超一流」睨みを利かすグラン＆ミルド。
「分かってるって・・冗談だよ、頼りにしてるぜ相棒・・」

通信＝グラン［ルート４７でターゲットの車を確認、追尾。３８ブロックを西に移動中］
ミラ［割り出すと・・おそらく三番街に向かっている・・ルート沿い４０ブロックで待ち伏せしろ、一部住民に厳戒態勢を取らせてある、ゴーストタウンの出来上がり。最小の被害に留めろ、忘れるな、お前らは実験動物でターゲットはサンプル、精々いいデータを残すんだな］
車内の険悪なムード。グラン［ラジャー］・・通信ＯＦＦ
スティービー「ムカつく野朗だ」
ブラットジョー「違うな、ムカつくアバズレだ」
モーリス「腹は立つけど良い結果を出さないと廃棄されるのは自分達だ」
沈黙・・グラン「俺達は籠の中の鳥じゃない・・いつか運命を切り開く時が来る」
「・・・ラジャー・・・」
４０ブロック到着＝輸送車でルートを閉鎖。
グラン「モーリス＆エレガノはビル屋上に配置、狙撃の体制を取り合図を待て。ミルドはターゲットの車を止めろ、スティービー＆ブラットジョーは出てきたところを捕獲、手に余る様なら殺れ。相手は音に聞いたサーティーンだ、舐めて掛かるな」
「ラジャー」
スティービー「運命を切り開くために、俺らはサーティーンを切り

刻む」
「いいライムだぜ相棒・・」
拳を合わせ姿を景色に乗じる二人。壁を走る男にしがみ付くエレガノ＝屋上でスコープを合わせる。街中に身を潜めるグラン、輸送車の前に仁王立つミルド。
通信＝ミラ［ターゲットが約三分でそこを通過する。準備はできているな？］
グラン［ハイエナの狩りを見せてやります］
ミラ［ハリウッド映画みたいないんちきアクションにならねー様にな］
［こちらエレガノ、ターゲットの車をスコープに捕えました］
グラン［ミルド・・］
「ラジャー」

＃

４０ブロックの標識。突如、消えた道路を賑やわせていた車や人が居なくなり、まるで別世界に迷い込んだみたいだ。
「ミシェル、ここはいつも墓場みたいに静かなのか」
あたりを見渡しながら「ううん・・いつもはもっと活気がある地区だよ・・」不思議そうに外を眺める・・目の前に立ちふさがる軍用車「ちぃ、さすがは理性の街か対応が早いな」アルセルを踏み突っ切る。速度８０マイルを超えた時、白眉のデカぶつはニヤっと口元から伸びる牙を食いしばった。獣の様な四足歩行、猛然と走り寄る
「こいつはやばい匂いがするな、ミシェル！頭を低くしてな」
「はい」しおらしく言われた通りに行動。
通信＝モーリス［ターゲットを捕えました発砲許可を・・］
片手でハンドルを操作したまま窓から発砲＝屋上の男に威嚇射撃。
モーリス「おっと、もうばれたか。エレガノあいつできるよ」
エレガノのビジョン・・「タイヤを撃って・・突破されるわよ」

通信＝モーリス［エレガノの予知眼です、ターデットの狙撃は難しいですが、車体を止めることは可能です］
通信＝グラン［狙撃を許可する・・追伸、ステルスコンビへ、食事の時間だ野朗共、車が止ったら一斉にかかれ］
左右にかく乱する俊敏さ「ファック、犬野朗が・・」パン、タイヤの破裂音。横にスライドする車。ミルドはサイドステップを繰り返し弾丸をかわしターゲットの車と衝突寸前に跳ね上がった。車の停止、同時に運転席のドアが開き回転しながら転がり跳ね上がった巨体に銃を向ける、が一瞬早くミルドが蹴る。弾かれる銃・・取っ組み合い・・喉元を噛み切ろうと牙を抗う・・それを一蹴。追撃＝ミルドの巨体は軍用車に打ちつけられた。空気の歪み、それ自体が殺気を帯びている様な存在感。シャキン。スティービー&ブラッドジョーのサーベルを抜く音がキーンと響く、エレガノ上空からの援護射撃&モーリスは壁を駆け下りながらアサルトライフルを発射、ミルドは何も無かったかの様に立ち上がり突進&ゆっくり歩きながら確信するグラン＝ハイエナの由縁。「化け物共が・・」援護射撃の死角に移動しながら敵の見えないサーベル&拳打をかわす。
グラン「チェックメイトだ、」
背後から銃を突きつけられフリーズした俺は横目でミシェルを見た、刃の冷たさが喉元と脇に触れる、動くなと言わんばかりにスコープから覗く瞳が殺意を表す。
「この街じゃ礼儀ってのを教わらないのか」
ぐにゃっと姿を現す兵隊。
スティービー「本能の街の出身者に礼儀を教われるとは光栄だな」
ミルドのボディーへの一撃。くの字に折れる身体を正す刃。
ブラッドジョー「こいつは減らず口を叩く野朗が嫌いなんだ」
通信＝エレガノ［少女を確保］
ミシェルは抵抗している「おじさん、助けて・・私ホントは家に戻りたくないの」
家に戻りたくない・・あまり深く考えてる余裕はなさそうだ「あの

ガキ傷つけたらテメ～らただじゃすまないぜ」
スティービー「誘拐犯が何言ってんだ。俺らが正義のヒーロー・・・
ブラットジョー「お前は悪の親玉ってところか」
・・・予知眼・・閃光・・・
通信＝エレガノ［まずい、閃光弾よ］
ボン、と同時に光があたりを暗闇に変えた
女の声「清春着いて来て」手を引かれる。
聞き覚えのある声に・・「ミシェル・・」
「大丈夫、ジョンが連れてくるわ」
声の正体が分かった。ジョン・・ブルーイナフのナンバーエイト、
そして、俺の手を引くのがトゥエルブのメネシス。生き残った仲間
達・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9548c/

Bible of No name city

2010年10月21日21時16分発行